

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第6集

茨城県稲敷市

# 宮平遺跡

市崎神宮寺地区集落道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

稲敷市教育委員会  
(有)毛野考古学研究所

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第6集

茨城県稲敷市

# 宮平遺跡

市崎神宮寺地区集落道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

稲敷市教育委員会  
(有)毛野考古学研究所

## 例 言

1. 本書は、茨城県稲敷市市崎地区に所在する宮平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、市崎神宮寺地区集落道路整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3. 調査及び報告書作成は、稲敷市からの委託を受けた(有)毛野考古学研究所が稲敷市教育委員会・市崎神宮寺地区集落道路整備事業内遺跡発掘調査指導委員会の指導の下に実施した。
4. 遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。  
所在地 稲敷市市崎字宮平1210番地外  
調査期間 平成21年2月11日～平成21年3月30日  
整理期間 平成21年12月9日～平成22年3月25日  
調査面積 1,493㎡
5. 調査担当者は以下の通りである。  
土生 朗治 ((有)毛野考古学研究所調査員)
6. 調査で得られた資料は稲敷市教育委員会で保管している。
7. 調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。  
人見晩朗 鈴木美治 松浦 敏 斎藤弘道 平田漢男 稲敷市立歴史民俗資料館 茨城県文化課  
J・T空撮 (有)カワヒロ産業
8. 本書の作成にあたっては、出土遺物実測図の監修で松田政基、作業全般で賀来孝代、実測図作成・トレース・図版作成で三澤京子、小出陽子、鬼山由子、神宮明美、仙波菜津美、高橋真門、根本正子の協力を得た。
9. 発掘調査参加者は以下の通りである。  
池田美雪、江口弥男、岡田 脊、沖日出夫、尾崎紀江、表 豊、河合淳子、清原 卓、埴崎富男、寺崎清次、豊田今朝男、箕輪 隆、宮本博文、宮本富夫、森永典昭、四ツ谷栄

## 凡 例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、稲敷市発行2千5百分の1都市計画図である。
2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。  
S I・・・竪穴住居跡 SK・・・土坑 SD・・・溝 K・・・攪乱
3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。  
竪穴住居跡・・・1/60 土坑・・・1/40 溝・・・1/120
4. 土層と遺物の色調は「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 (財)日本色彩研究所)を使用した。
5. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は( )内数値が計測推定値を、[ ]内数値は現存値を表す。
6. 遺構本文中の一は、残存していない、調査範囲内で確認されていないこと、あるいは不明であることを示す。

# 目 次

例言・凡例

目次

第I章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第II章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 調査の方法と基本層序	
第1節 調査の方法	4
第2節 基本層序	4
第IV章 遺構と遺物	
第1節 竪穴住居跡	7
第2節 土坑・井戸跡	38
第3節 ビット	44
第4節 溝	44
第5節 遺構外遺物	51
第V章 総括	56

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第13図 6号住居跡・出土遺物	13
第2図 調査区の位置図	3	第14図 7号住居跡出土遺物	14
第3図 基本土層図	4	第15図 8・9号住居跡	15
第4図 遺構全体図	5	第16図 9号住居跡出土遺物	16
第5図 1・2号住居跡	7	第17図 10号住居跡	17
第6図 2号住居跡出土遺物	8	第18図 10号住居跡出土遺物	18
第7図 3号住居跡	9	第19図 11号住居跡	19
第8図 3号住居跡出土遺物	9	第20図 11号住居跡出土遺物	20
第9図 4号住居跡	10	第21図 12号住居跡	21
第10図 4号住居跡出土遺物	11	第22図 12号住居跡出土遺物	22
第11図 5号住居跡	12	第23図 13号住居跡	23
第12図 5号住居跡出土遺物	12	第24図 13号住居跡出土遺物	24

第25図	14号住居跡	25	第42図	11号土坑出土銅銭	41
第26図	14号住居跡出土遺物	26	第43図	29・32・33号土坑	42
第27図	15号住居跡	27	第44図	32号土坑出土遺物	42
第28図	15号住居跡出土遺物	28	第45図	1・2号溝	44
第29図	16号住居跡	29	第46図	2号溝出土遺物	45
第30図	16号住居跡出土遺物1	30	第47図	3・4号溝	46
第31図	16号住居跡出土遺物2	31	第48図	3号溝出土遺物	47
第32図	17号住居跡	33	第49図	4号溝出土遺物	48
第33図	17号住居跡出土遺物	34	第50図	6号溝	49
第34図	18号住居跡	36	第51図	7号溝出土銅銭	49
第35図	18号住居跡出土遺物	37	第52図	7号溝	50
第36図	19号住居跡	37	第53図	遺構外出土縄文土器1	52
第37図	19号住居跡出土遺物	38	第54図	遺構外出土縄文土器2	53
第38図	2号土坑出土遺物	38	第55図	遺構外出土弥生土器	54
第39図	2・5・6号土坑	39	第56図	遺構外出土土師器	55
第40図	土坑・ピット群、1号井戸、7号住居跡	40	第57図	遺構外出土滑石製品	55
第41図	3・8・9・11・13号土坑・ 7号住居跡上層	41			

## 表目次

表1	2号住居跡出土遺物観察表	8	表14	16号住居跡出土遺物観察表	32
表2	3号住居跡出土遺物観察表	10	表15	17号住居跡出土遺物観察表	35
表3	4号住居跡出土遺物観察表	11	表16	18号住居跡出土遺物観察表	36
表4	5号住居跡出土遺物観察表	12	表17	19号住居跡出土遺物観察表	38
表5	6号住居跡出土遺物観察表	13	表18	11号土坑出土遺物観察表	41
表6	7号住居跡出土遺物観察表	13	表19	32号土坑出土遺物観察表	41
表7	9号住居跡出土遺物観察表	17	表20	土坑・覧表	43
表8	10号住居跡出土遺物観察表	18	表21	ピット一覧表	43
表9	11号住居跡出土遺物観察表	20	表22	2号溝出土遺物観察表	45
表10	12号住居跡出土遺物観察表	23	表23	3号溝出土遺物観察表	47
表11	13号住居跡出土遺物観察表	24	表24	4号溝出土遺物観察表	47
表12	14号住居跡出土遺物観察表	26	表25	7号溝出土遺物観察表	50
表13	15号住居跡出土遺物観察表	28			

## 写真図版目次

- P L. 1 遺跡全景
- P L. 2 調査前風景、北東部・南西部全景、  
2～5号住居跡
- P L. 3 7～12号住居跡
- P L. 4 14～16号住居跡
- P L. 5 16～19号住居跡
- P L. 6 中世土坑・ピット群、2・3・5～7  
・16号土坑
- P L. 7 29・30～33号土坑、1・3・4号溝
- P L. 8 4～7号溝
- P L. 9 3・4号住居跡出土遺物
- P L. 10 7号住居跡出土遺物
- P L. 11 10・11・13～16号住居跡出土遺物
- P L. 12 16・17・19号住居跡、4号溝出土遺物
- P L. 13 18号住居跡出土遺物
- P L. 14 2・4・7号溝、11・31・32号土坑出土  
遺物
- P L. 15 16・17号住居跡出土滑石製品
- P L. 16 7～15号住居跡出土双孔門盤・白玉、  
遺構外出土石製模造品
- P L. 17 遺構外出土縄文土器
- P L. 18 遺構外出土弥生土器

# 第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

今回の道路整備事業について、計画段階の平成 14 年に、当時の茨城県江戸崎土地改良事務所より、東町教育委員会に対し、計画予定地に関する埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会があり「計画地には、北の崎・宮平・牛谷・塙下等、周知の遺跡が存在するが、工事内容等が不明のため、工事中段階で再度照会されたい」と、平成 14 年 7 月 23 日付で回答（1 次）している。

平成 17 年の町村合併後、農村振興総合整備（むらづくり基盤型）事業の一環として、稲敷東部地区市崎神宮寺地区集落道路整備事業が位置付けられ、平成 19 年 3 月 7 日に稲敷土地改良事務所、農政課、道路維持課、歴史民俗資料館（教委文化財担当）が出席した当該事業の打合せ会議において、測量、地元説明会、路線決定、用地買収等の事業計画が示された。平成 20 年 1 月 24 日付で、茨城県稲敷土地改良事務所より、稲敷市教育委員会に対し、稲敷市神宮寺 1531 外 35 筆の道路予定地に係る埋蔵文化財の取扱いの照会があり、1 月 30 日に文化財保護指導員の人見先生と共に現地踏査を実施し、3 月 6 日付で宮平遺跡等の所在と試掘及び本調査が必要である旨の回答（2 次）を行う。

7 月 11 日に試掘調査を実施し、27%に相当する約 400m のトレンチ内から、縄文・古墳・奈良平安時代と思われる住居跡状遺構 27、土坑状遺構 7、溝状遺構 4 と縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土した。その旨と 94 条の届出が必要との回答（3 次）を、7 月 25 日付で出し、10 月 1 日付で 94 条の届出があり、県文化課へ送達した。その後、発掘調査に向けての準備を進める一方、県文化課から指導助言を受ける。平成 21 年 2 月 10 日に、稲敷市長（農政課）、教育長、毛野考古学研究所の 3 者で協定を結び、92 条の届出をし、2 月 11 日～3 月 30 日までの調査期間で現地調査を行い、出土遺物等の整理、報告書の刊行は 21 年度末を予定することとなった。

（稲敷市教育委員会、平田満男）

## 第 2 節 調査の経過

平成 21 年 2 月 12 日、重機による表土除去作業を開始する。16 日から作業員による遺構確認作業を開始する。19 日には、重機による表土除去作業を終了し、遺構確認状況図を作成する。20 日以降、調査地区の北東部で確認された、中世の溝跡の掘り込み作業を開始する。27 日には溝跡の掘り込みが終了し、写真撮影を行い、竪穴住居跡の掘り込みを開始する。北東部の竪穴住居跡は弥生時代後期のものが目立ち、中世の溝跡の北西部には、中世の粘土貼り土坑や大型井戸等が見られ立木の抜き取り穴も多くあることが判明する。

3 月上旬に南西部の竪穴住居跡の調査を開始する。中旬には、中世の上坑や井戸跡の調査を一端中断し、南西部の古墳時代の竪穴住居跡の調査に主力を注ぐ。ほぼ竪穴住居跡の掘り込みが終わり、17 日には、稲敷市教育委員会及び調査指導委員会、農政課担当者の来跡を仰ぎ、深度のある井戸の調査について、現場で打ち合わせを行う。18 日以降には、再び北東部の中世の土坑や大型井戸の調査を行う。21 日～23 日には住居跡床下の掘り方調査を行い、23 日には、遺跡全体の清掃作業を行う。24 日には空中写真撮影を行い、続けて 27 日～29 日にかけて、平面図作成・レベリング作業を行い、30 日には現地における調査をすべて終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

稲敷市は茨城県南東部にある。市域の北東部は霞ヶ浦に面し、南部は利根川が東流し、千葉県と接する。北部では美浦村、北西部では阿見町、西部では牛久市・竜ヶ崎市の、南西部で河内町に接している。地形は、概ね平坦で中央に小野川、新利根川がそれぞれ東流し、霞ヶ浦に注いでいる。これらの河川、並びに利根川、霞ヶ浦沿いには水田地帯が開けている。霞ヶ浦の湖岸低地と利根川沿いの低地に挟まれる形で、稲敷台地が東から延びている。稲敷台地上は畑耕作地を主体とし、その中に集落及び平地林が点在している。台地の標高は20～30mで、台地縁辺部では小野川などの河川によって開折され、狭い谷底平野が樹枝状に発達している。

宮平遺跡は稲敷台地の南東端部、阿波丘陵上にあり、現利根川北岸の低地平野（旧古鬼怒湾）を見下ろす標高約25mの台地上に立地する。遺跡の範囲は、今回の調査地点の南西側にも土器散布範囲は広がっており、集落は南や西方向にも展開しているものとみられる。

### 第2節 歴史的環境

縄文時代においては、遺跡の東方約100m地点にある福田貝塚が著名である。福田貝塚は、縄文時代後期前葉の堀之内1式期と加曾利B1～3式期の貝層で、明治27年以降発掘が行われ、土器や土製品の出上りが知られているが、昭和46年の平安博物館の調査では、土器・土製品以外にも食料資源として貝類38種をはじめとして魚類・陸生は乳類等の自然遺物が多種類検出されている（註1）。

弥生時代においては、近年の調査で、弥生時代後期を主体とした集落跡が確認されている。榎の台古墳群で6軒、大日山古墳群で8軒、思川遺跡で3軒、堂の上遺跡で3軒、塚本遺跡で3軒の合計23軒である。

古墳時代においては、古墳群や集落跡が多くみられる。周辺の古墳では、東大沼古墳群の第7号墳から、金環、直刀7本、鉄鏃、多種類の玉類が出土している。古墳時代の一般集落は、古墳時代前～中期の調査例が少なく、後期以降の調査例が多い。調査数の多さに対応するように、後期の集落の実数は多いものと思われる。榎の台古墳群内の6世紀初頭前後の時期の竈穴住居跡からは、TK47段階の須恵器と初期カマドが見られる。この時期の集落跡は、市内において調査例が多く、堂の上遺跡はこの時期の最大規模の遺跡である。後期中葉以降についても、思川遺跡や柏木古墳群等で7世紀代の集落跡が調査されている。

奈良・平安時代においては、宮平遺跡の北東約500m地点に塔の前寺院跡があり、古瓦が採集されている。同じ台地上東約1.8km地点には幸田台遺跡があり、三面庇付きの仏堂と考えられる掘立柱建物跡、僧坊と考えられる長屋状の大型建物跡が確認され、出土遺物では灰釉陶器の浄瓶等が出土している。

中世においては、この地城は東条氏の拠点となる、東条庄下条の範畴にあったとされている。遺跡の北東方向には、南朝北島親房の足跡の残る神宮寺城や阿波崎城がある。遺跡の南東800mにある福田の徳林寺の仏像銘には、14世紀末から15世紀末にかけて、東条氏との関係を窺わせる資料が残っており、東条氏の一族の存在が推測されている（註2）。さらにまた、遺跡の南西約1kmにある東大沼の新宮神社の永禄2年の棟札写しからは、この地に戦国期まで東条氏一族の大沼氏が存在していたことが推測されている（註3）。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1 宮平遺跡 2 堀下遺跡 3 東大沼古墳群 4 半田古墳群 5 東大沼城跡 6 清水古墳群 7 福田貝塚 8 塔の前寺院跡  
 9 西原古墳群 10 福田古墳群 11 幸田城跡 12 出戸遺跡 13 幸田台遺跡 14 竜貝古墳 15 阿波元貝城跡  
 16 笠ノ塚城跡 17 零合遺跡 18 前山古墳 19 神宮寺城跡 20 馬場遺跡 21 馬場尻かまど跡 22 町山穴宮跡  
 23 東桑高田城跡 24 青宿古墳 25 青宿遺跡 26 馬場添遺跡 27 神宮寺台遺跡 28 井戸畑遺跡 29 福田遺跡  
 30 野口遺跡 31 中寄合遺跡  
 32 神田遺跡 33 西久保遺跡  
 34 南遺跡 35 戸城台遺跡  
 36 幸田古墳群 37 宮前西遺跡  
 38 幸田原山遺跡 39 大林遺跡  
 40 中沢遺跡 41 戸崎遺跡  
 42 北の岡遺跡 43 久保遺跡  
 44 牛谷遺跡 45 柳平遺跡  
 46 原遺跡 47 中台遺跡  
 48 西畑遺跡 49 新畑遺跡  
 50 荒久遺跡 51 椎家城跡  
 52 隠里の塚古墳 53 椎家台遺跡



第2図 調査区の位置図

## 第三章 調査の方法と基本層序

### 第1節 調査の方法

調査は、市崎神宮寺地区集落道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として行われ、道路幅約8m、長さ約190mの細長い調査範囲に対して行った。本調査に先立って稲敷市教育委員会によるトレンチ試掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本調査では、試掘結果に基づいて、地区全体の表土除去を実施した。測量の基準杭とグリッド設定は世界測地系の公共座標に基づいて行った。起点A1における公共座標の値は第IX系の $X = -6000$  m、 $Y = +47800$  mである。グリッド杭は $10 \times 10$  mで設定し、南北方向をX軸として起点A0から南へ向かって0、1、2…、東西方向をY軸として起点A0から東へ向かってA、B、C…と付番した。各グリッドの呼称は北西角の杭にグリッドの名称を対応させて使用した。

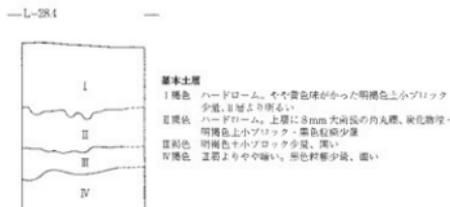
調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

遺構測量の記録は $1/20$ 縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、 $1/10$ 、 $1/40$ 縮尺を使用した。遺跡全測図は $1/200$ で作成した。

写真撮影は調査の各段階に応じて随時行い、白黒35mm判、白黒 $6 \times 7$  cm判、デジタルカメラを使用した。

### 第2節 基本層序

調査区の南西部の標高28mの台地上で記録した。表層は暗褐色の耕作土層で、厚さ約20cm。その下が遺構確認面のI層である。I層は、やや黄色味がかった褐色ハードロームで、明褐色土小ブロックを少量含んでおり、II層よりもやや明るい。II層は、上層に角の丸い礫や炭化物粒、明褐色土小ブロックを含んだハードローム層である。III層は、明褐色土小ブロック、黒色粒を少量含んだハードローム層である。IV層は、III層よりやや暗い、黒色小粒を極少量含んだハードローム層で、第2黒色帯上部に相当すると考えられる。各層ともやや粘性があり締りが強い。



第3図 基本土層図

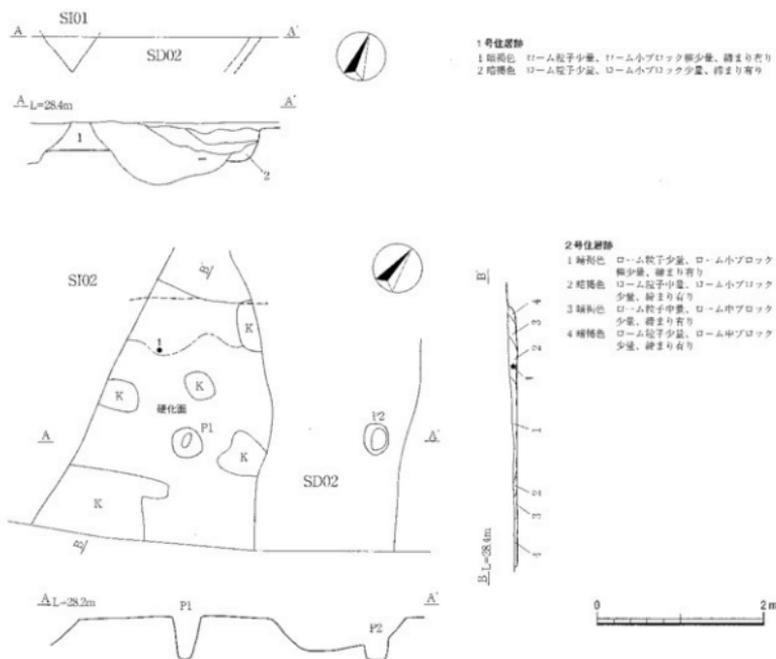


# 第IV章 遺構と遺物

## 第1節 竪穴住居跡

### 1号住居跡 (第5図)

**位置** 調査区の北東部 O15 グリッドにある。 **規模と平面形** — **主軸方向** — **壁** 壁高は約7cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 2～4号溝に切られて50cm×60cmの三角形に切られた床面の一部と東壁の一部が残存している。 **ピット** — **炉** — **覆土** 覆土は1層で、自然堆積と考えられる。 **遺物** — **所見** 出土遺物がなく時期は不明であるが、中世後半代の2～4号溝よりも古い遺構で、周辺の住居跡との関連から弥生～古墳時代後期の遺構の可能性が考えられる。

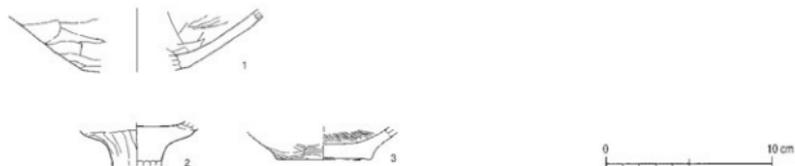


第5図 1・2号住居跡

## 2号住居跡（第5・6図）

**位置** 調査区の北東部 P15 グリッドにある。 **規模と平面形** [3.0] × [2.2] m **主軸方向** 一壁 壁高は約 10cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 2・3号溝に切られて 3 m × 2.2 m の範囲の床が残存している。

**ピット** 2箇所。P 1 は深さ 53cm、P 2 は深さ 53cm、支柱穴と考えられる。 **炉** 一 覆土 覆土は 4 層である。 **遺物** 覆土から古墳時代後期の土師器高坏片、壺底部片が出土している。高坏は、脚の基部が細く中実、小型の壺は、体部内外面ミガキが主体で 5 世紀前葉か 5 世紀後半頃に見られる形状である。 **所見** 出土遺物の中で、高坏は脚部の基部のみが中実になる 5 世紀後半頃のものかと思われる。



第6図 2号住居跡出土遺物

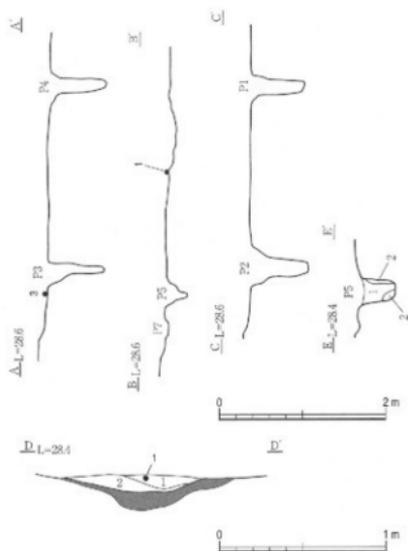
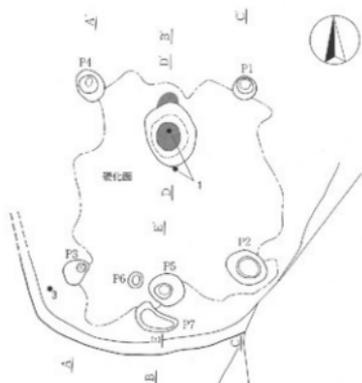
表1 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	高坏	-	-	-	石英、白色粒、赤褐色粒	にぶい褐色	良好	坏体片。内外面ナデ。	
2	土師器	高坏	-	-	-	石英、白色粒、細砂粒	にぶい褐色	良好	脚基部片。内外面ナデ。	
3	土師器	壺	-	-	5.6	石英、白色粒	褐色	良好	胴部内外面ミガキ、底部ヘラケズリ。	

## 3号住居跡（第7・8図）

**位置** 調査区の北東部 O16 ~ P16 グリッドにある。 **規模と平面形** (4.0) × - m **主軸方向** N-3°-E

**壁** 壁高は約 5cm、やや外傾して立ち上がる。 **床** 北東部が削平されているが、中央部から南西部にかけて硬化した床が残存している。 **ピット** 7箇所。P 1 ~ P 4 は深さ 49 ~ 73cm で支柱穴と考えられる。P 5・6 は出入りピットと考えられる。P 7 は出入り口ピットと南壁の間に浅い窪み穴で、性格は不明である。 **炉** 中央部やや北寄りにあり、住居跡の主軸方向に長く、長径 0.79 m、短径 0.60 m、深さ 9 cm である。火床面は赤変硬化している。 **覆土** 覆土はほとんど残存していないが、炉の覆土は確認されている。 **遺物** 床面や炉の覆土から弥生時代後期の土器が出土している。 **所見** 出土遺物と遺構の形状から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



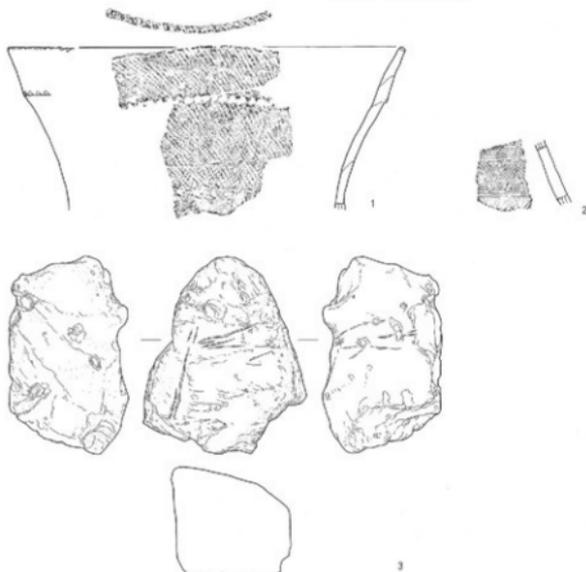
3号住居跡伊土層

1 灰白・赤褐色 炭土粒少量、炭化微粒を含む石灰多量、軟らかい  
 2 暗赤褐色 炭土小ブロック多量、炭土粒少量、やや硬まり有り

3号住居跡 P5

1 灰褐色 ローム粒子少量、やや軟らかい  
 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック多量、やや軟らかい

第7図 3号住居跡

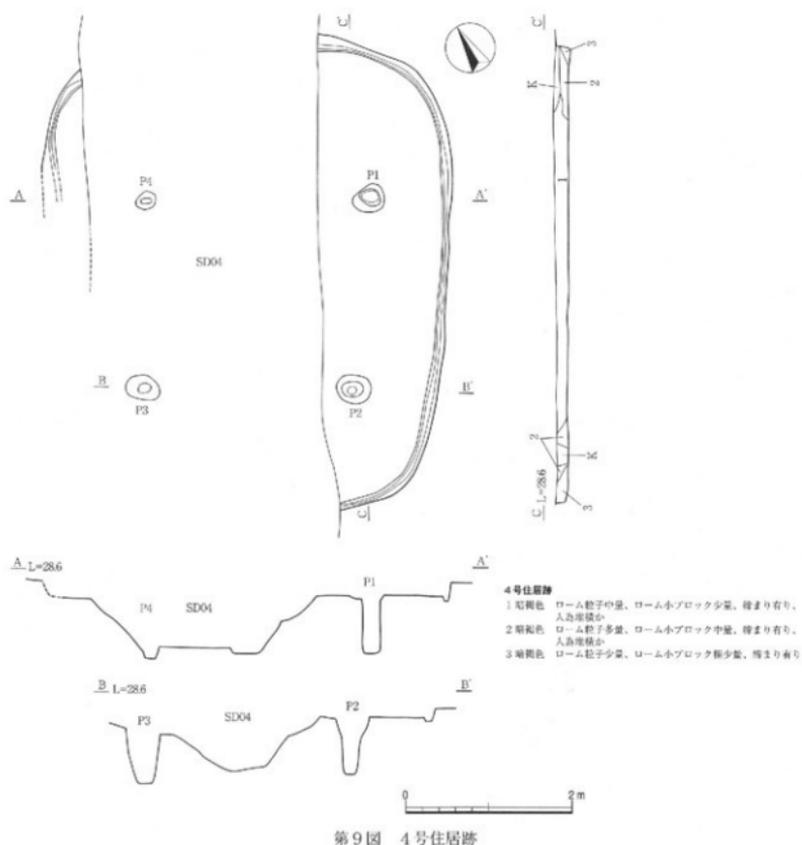


第8図 3号住居跡出土遺物

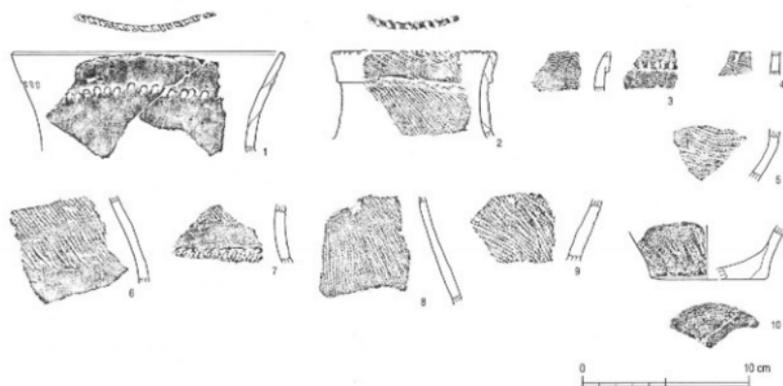
表2 3号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色相	焼成	特徴	備考
1	赤生土器	壺	(24.0)	-	-	石英、白色粒、細砂粒	にぶい褐色	良好	口唇部と口縁部から頸部にかけて、LのZ巻き原体を付加した付加条1種焼文を施す。口縁部と頸部との境に棒状工具による連続した刺突列を施す。	
2	赤生土器	壺	-	-	-	石英、白色粒、細砂粒	黒色	良好	5本1単位の楕円状工具により、2段の横走文と横走文間に縦溝状文を施す。側面付加条1種焼文で、RのS巻き原体を付加する。	
3	石版呈	砥石	長120 幅9.8 厚6.7	重120g	軽石					

4号住居跡 (第9・10図)



位置 調査区の北東部 O16 グリッドにある。規模と平面形 5.78 × 4.98 m 主軸方向 N-32°-E 壁  
 壁高は約 16cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 中央部が 4 号溝によって削平されているが、残存する南  
 部では全体に硬化が見られた。ピット 4 箇所。P 1 ~ P 4 は深さ 70 ~ 74cm で主柱穴と考えられる。  
 炉 覆土 覆土は 3 層で、自然堆積と考えられる。遺物 覆土から弥生時代後期の土器が出土してい  
 る。所見 出土遺物と遺構の形状から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



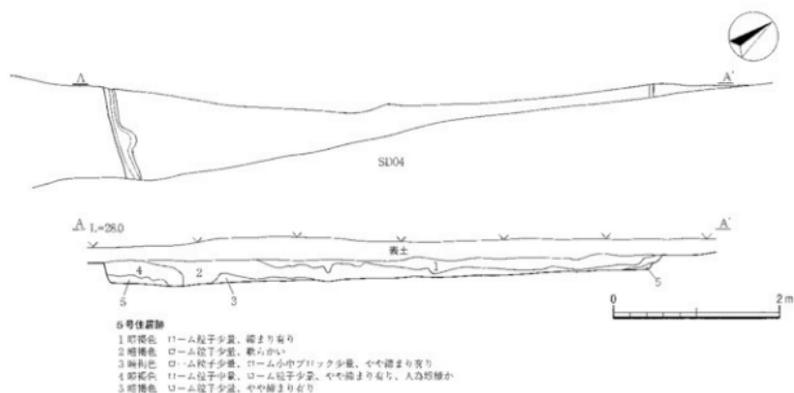
第 10 図 4 号住居跡出土遺物

表 3 4 号住居跡出土遺物観察表

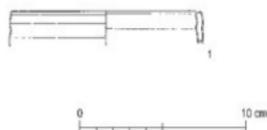
区画 番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	弥生土器	壺	(15.0)	-	-	石英、白色粒、細砂粒、海綿骨針	暗褐色	良好	口唇部黒赤原体によるキザミ。口縁部直下連続刺突を獲す。	
2	弥生土器	壺	(10.0)	-	-	石英、白色粒、細砂粒、海綿骨針	暗褐色	良好	口唇部に付加条原体によるキザミ。口縁部に付加条 1 種縄文を施文。	
3	弥生土器	壺	-	-	-	白色粒、石英粒	褐色	良好	口縁部内面波状文、外面下端にキザミ、頸部に波状文。	
4	弥生土器	壺	-	-	-	白色粒、石英粒	褐色	良好	頸部波状文。	
5	弥生土器	壺	-	-	-	白色細粒	にぶい褐色	良好	頸部付加条 1 種縄文。	
6	弥生土器	壺	-	-	-	白色細粒多量	黒色	良好	頸部付加条 1 種縄文、L の Z 巻き原体を付加する。	
7	弥生土器	壺	-	-	-	石英粒、雲母粒多量	にぶい暗褐色	良好	頸部無文部を挟んで、頸部付加条 1 種縄文、胴部単筋 R L 縄文。	
8	弥生土器	壺	-	-	-	石英粒多量	褐色	良好	頸部付加条 1 種縄文。	
9	弥生土器	壺	-	-	-	白色細粒	赤褐色	良好	頸部付加条 1 種縄文、付加 2 条。	
10	弥生土器	壺	-	-	(7.0)	白色・石英粒多量	にぶい黄色	良好	底部木炭痕。胴部付加条 1 種縄文。	内面に 蒸気痕

### 5号住居跡 (第7・11・12図)

**位置** 調査区の北東部 O15～O16 グリッドにある。 **規模と平面形** (3.70) × (0.55) m **主軸方向** N-19°-E **壁** 壁高は約 28cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 南部が4号溝によって削平されているが、残存する部分では全体に硬化が見られた。 **ピット** — **炉** — **覆土** 覆土は5層で、西壁際の4層以外は自然堆積と考えられる。 **遺物** 覆土から須恵器片が出土している。須恵器片は短頸壺I緑部片である。 **所見** 出土した須恵器短頸壺口縁は、古墳時代後期のものと見られる。



第11図 5号住居跡



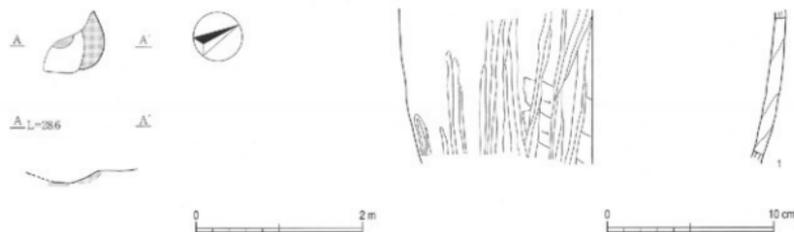
第12図 5号住居跡出土遺物

表4 5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	須恵器	壺	(70)	-	-	石英、白色粒	灰色	良好	口縁部内面のロクロナダのうねりが強く、坯身や坯蓋の口縁部ではなく壺蓋口縁部と思われる。	

### 6号住居跡 (第13図)

**位置** 調査区の北東部 E26 グリッドにある。 **規模と平面形** — **主軸方向** — **壁** — **床** — **ピット** — **カマド** カマドの燃焼室の火床面と右奥壁の一部が残存していた。 **覆土** — **遺物** カマド覆土から土師器の甕の胴部片が出土している。 **所見** 出土遺物から見て、平安時代の住居跡と考えられる。住居の大部分が壊されて、掘乱穴に削られたカマドの一部のみが残存していた。



第13図 6号住居跡・出土遺物

表5 6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	甕	-	-	-	石英粒、褐色細粒、白色粒	にぶい褐色	良好	胴部外面ヘラケズリ後縦方向ミガキ。	

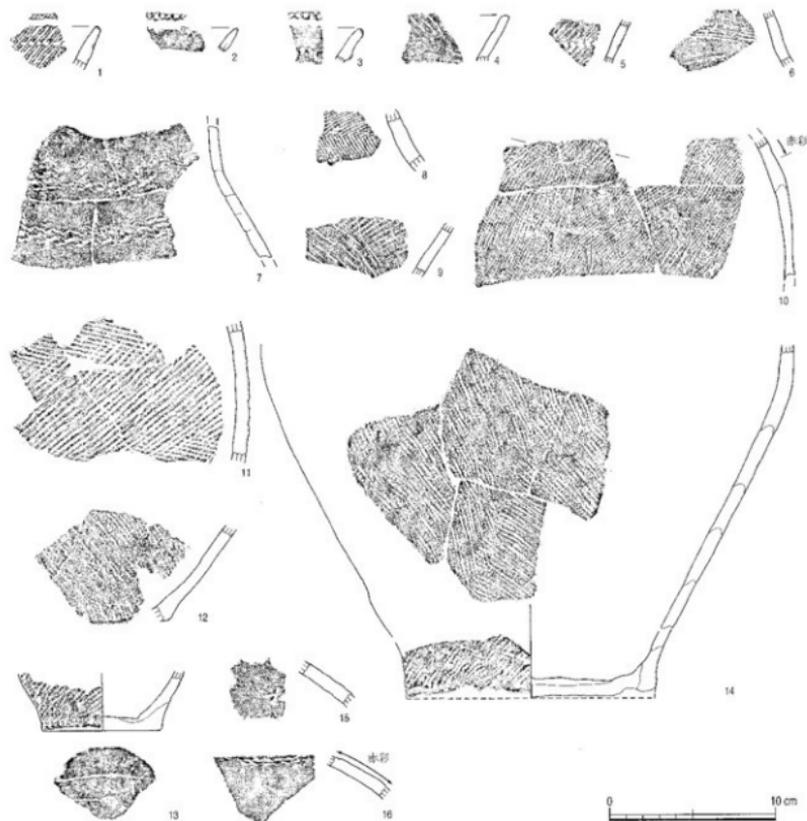
### 7号住居跡 (第14・40・41図)

**位置** 調査区の北東部 N16・N17・O16 グリッドにある。 **規模と平面形** 6.23×—m **主軸方向** — **重複関係** 中世の上坑・ピット群と重複している。 **壁** 壁高は約13cm、外傾して立ち上がる。 **床** 中世の土坑やピット、木の根穴によって壊されているが、残存する部分では硬化が見られた。 **ピット** 支柱穴

表6 7号住居跡出土遺物観察表

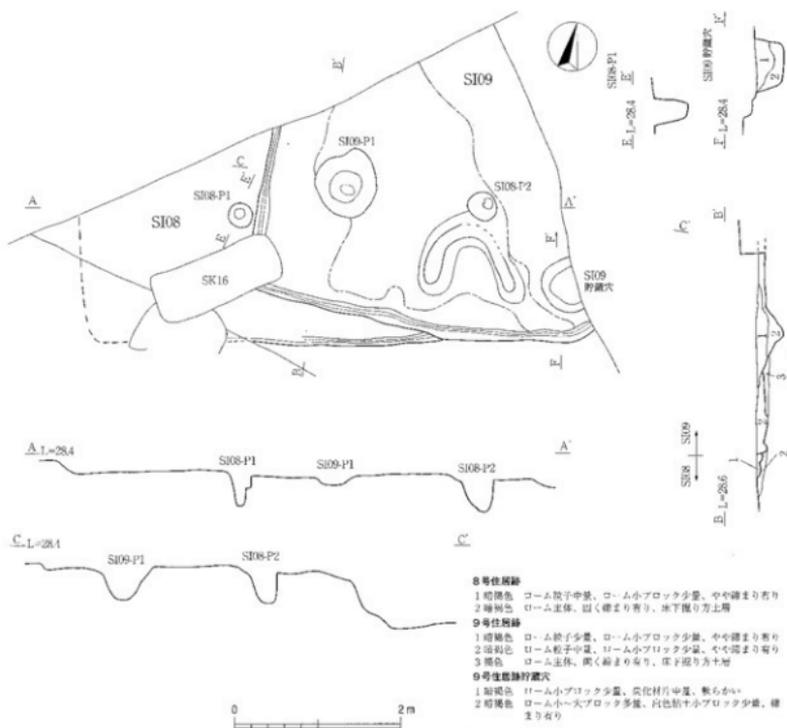
図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	弥生土器	壺	-	-	-	石英細粒多量	黒色	良好	口縁部付加糸原体によるキザミ。口縁部付加糸1種横文と竹管による刺突。	
2	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英単粒	暗褐色	良好	口唇部キザミ。	
3	弥生土器	壺	-	-	-	石英、白色粒、細砂粒、薄層骨針、雲母細粒多量	黒色	良好	口唇部キザミ。口縁部刺突列。	
4	弥生土器	壺	-	-	-	白色細粒	黒色	良好	口縁部単線縄文。	
5	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英細粒	暗褐色	良好	胴部付加糸2種横文、RのS巻き原体を付加。	
6	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・雲母粒	褐色	良好	葉状文、胴部に縄文。	
7	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・雲母・褐色粒	褐色	良好	結節文を二段に施す。	

の可能性があるピットもあるが、木の根穴が多く支柱穴の認定は困難である。 炉 — 覆土 覆土は2層で、自然堆積と考えられる。 遺物 覆土から弥生時代後期の土器片が46片出土している。 所見 中世の上坑・ピット群と重複しているため住居の形を明瞭にすることができなかったが、残存する覆土中の出土遺物から見て、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第14図 7号住居跡出土遺物

8	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・褐色粒	褐色	良好	半節L Rと半節R Lの羽状構成。
9	弥生土器	壺	-	-	-	白色・雲母粒	にぶい褐色	良好	胴部付加糸1種縄文、RのS巻きとLのZ巻き原体による羽状構成。
10	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英粒多量	にぶい褐色	良好	胴部付加糸1種縄文を施文、胴部中位に赤彩。
11	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・雲母・褐色粒	褐色	良好	輪縁不明の付加糸縄文で、LのZ巻きとRのS巻き原体を付加する。
12	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・雲母粒	にぶい褐色	良好	胴部輪縁不明の付加糸縄文、LのZ巻きの原体を付加。
13	弥生土器	壺	-	-	7.0	白色・石英細粒	赤褐色	良好	底部木炭痕。胴部付加糸2種縄文。
14	弥生土器	大型壺	-	-	(15.0)	白色・石英・雲母粒	褐色	良好	胴部付加糸1種縄文、RのS巻き原体を付加する。
15	弥生土器	壺	-	-	-	白色細粒	にぶい褐色	良好	肩部赤彩、盛り赤文。
16	弥生土器	壺	-	-	-	白色・石英・赤褐色粒	浅黄色	良好	肩部赤彩、半節R Lの回紋斜縄文。



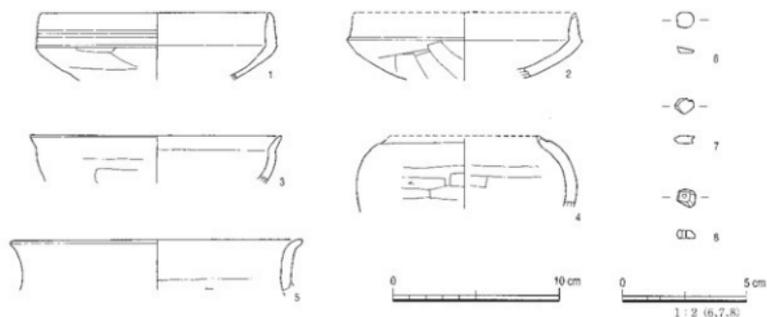
第15図 8・9号住居跡

### 8号住居跡（第15図）

**位置** 調査区の北東部L18グリッドにある。 **規模と平面形** — **主軸方向** — **壁** — **重複関係**  
 6号溝、9・10号住居跡よりも古く、9号住居跡の床下からP2が見つかっている。 **床** 9号住居跡  
 によって壊されているが、残存する部分でも耕作等によって壊されている。 **ピット** 2箇所。P1は深さ  
 45cm、P2は深さ48cm、主柱穴と考えられる。9号住居跡の出入り口周堤部の東側にはやや大きめの穴があ  
 る。 **カマド** — **覆土** 覆土はほとんど残存していない。 **遺物** — **所見** 遺構の形態から見て、古  
 墳時代後期の住居跡と考えられる。9号住居跡の出入り口周堤部の東側で見つかった貯蔵穴状の穴は、8号  
 住居跡の貯蔵穴の可能性が考えられる。

### 9号住居跡（第15・16図）

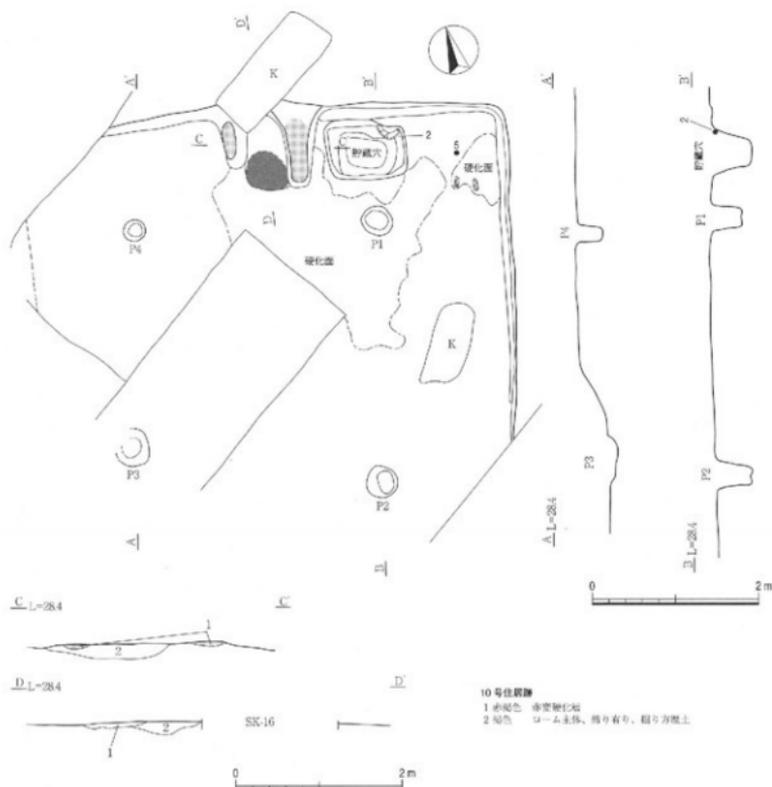
**位置** 調査区の北東部L18グリッドにある。 **規模と平面形** — **主軸方向** N-1°-W **壁** 壁は約8cm  
 残存している。 **重複関係** 6号溝、10号住居跡よりも古く、9号住居跡よりも新しい。 **床** P1から出  
 入り口の周堤部にかけて硬化している。 **ピット** 1箇所。P1は深さ45cm、周堤の東側にある貯蔵穴状  
 の穴は深さ約40cm、P1は主柱穴と考えられる。 **カマド** — **覆土** 覆土は10cm弱残存している。 **遺**  
**物** 覆土から土師器の坏、無頭の壺、甕の口縁部、石製模造品の白玉未製品が出土している。 **所見** 遺構  
 の形態から見て、古墳時代後期の6世紀前半頃の住居跡と考えられる。



第16図 9号住居跡出土遺物

表7 9号住居跡出土遺物観察表

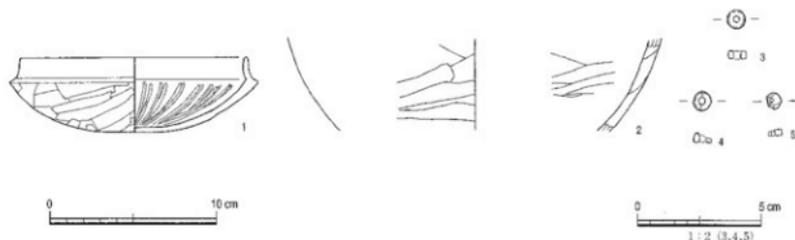
図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	坏	(14.0)	-	-	黒色微粒	にぶい藍色	良好	口縁部コナデ、底部ヘラケズリ。	
2	土師器	坏	(13.5)	-	-	石英を含む微砂粒	藍色	良好	口縁部コナデ、底部ヘラケズリ。	
3	土師器	坏	(15.0)	-	-	海綿骨針	にぶい褐色	良好	口縁部コナデ、体部ヘラケズリ。	
4	土師器	無須蓋	(8.6)	-	-	石英を含む微砂粒	明赤褐色	良好	胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
5	土師器	羹	(17.6)	-	-	石英を含む微砂粒	明褐色	良好	口縁部コナデ、内面ヘラケズリ。	
6	石製燧油星	白玉	径0.7 高0.25	孔径-	重0.14g	滑石製				未製品
7	石製燧油星	白玉	径0.8 高0.30	孔径-	重0.22g	滑石製				未製品
8	石製燧油星	白玉	径0.75 高0.35	孔径0.15	重0.27g	滑石製				未製品



第17図 10号住居跡

### 10号住居跡 (第17・18図)

**位置** 調査区の北東部L18グリッドにある。**規模と平面形** 5.8×m **主軸方向** N-1°-W **壁** 壁は約8cm残存している。**重複関係** 8号住居跡よりも新しい。**床** P1からカマド前面にかけて硬化している。南西側は地形傾斜によって削られている。**ピット** 4箇所。P1～P4は主柱穴で、深さ34～46cm、南西部のP3は擾乱穴によって壊され底面だけが残存していた。**カマド** 袖部幅1.20m、袖部奥行き1.02m、燃焼室幅0.50m、奥行き0.90m、煙道部の壁外への掘り込みはほとんどなく、縦方向に長いカマドである。亦硬化した火床面はかまどの前の方にある。**覆土** 覆土はほとんど残存しておらず、貯蔵穴覆土が残存している。**遺物** 貯蔵穴の縁から土師器の甕の胴部破片が出土している。滑石は、白玉製品が2点、白玉未製品が1点出土している。**所見** 遺構の形態と出土遺物から見て、古墳時代後期の6世紀後半頃の住居跡と考えられる。



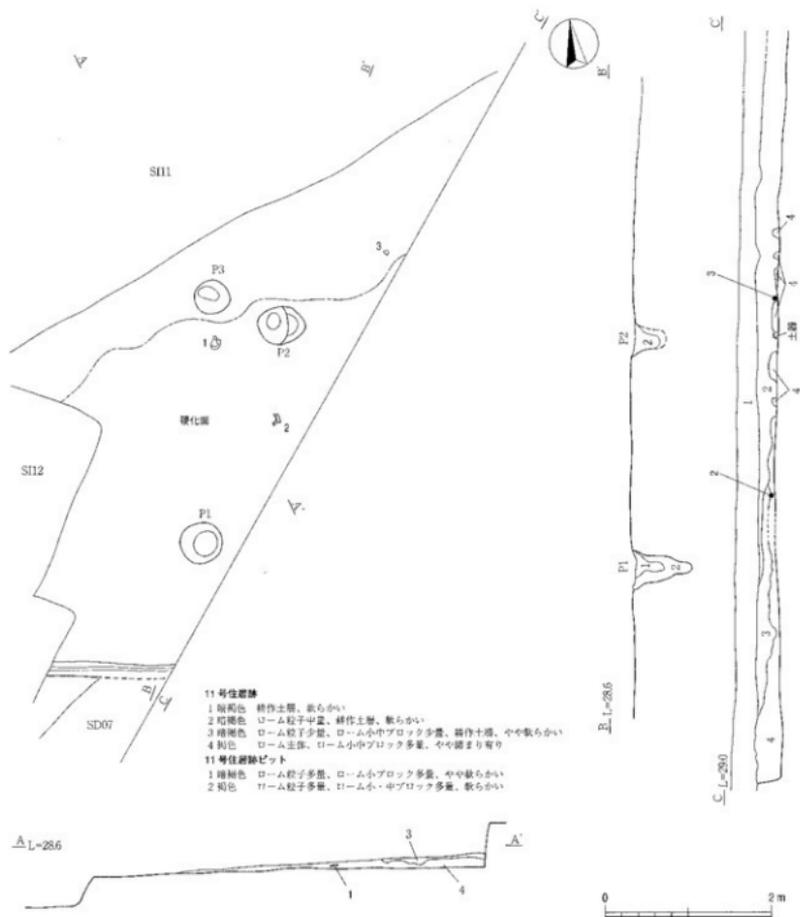
第18図 10号住居跡出土遺物

表8 10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	甕	136	45	-	石英質	明赤褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。体部内面放射状ヒガキ。	
2	土師器	甕	-	-	-	白色微粒、褐色粒、海綿骨針	明赤褐色	良好	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
3	石製模造品	白玉	径0.7	高0.30	孔径0.3	重0.24g	滑石製			
4	石製模造品	白玉	径0.75	高0.40	孔径0.25	重0.21g	滑石製			
5	石製模造品	白玉	径0.55	高0.25	孔径0.15	重0.16g	滑石製			未製品

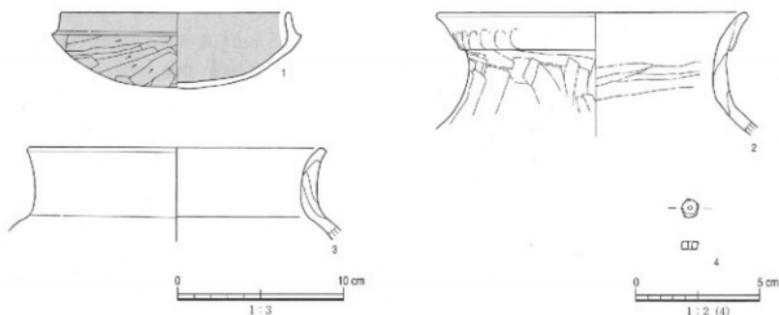
### 11号住居跡 (第19・20図)

**位置** 調査区の南西部H 23グリッドにある。**規模と平面形** — 主軸方向 — 壁 壁は約30cm残存している。**重複関係** 12号住居跡よりも古い。**床** 残存部全体が硬化している。床面には落とした焼土と炭化材片がまばらに残存している。**ピット** 3箇所。P1は深さ69cm、P2は37cm、P3は60cmである。**カマド** — **覆土** 覆土は1層で褐色土が主体である。表層からのトレンチャーによる耕作痕が覆土を切



第19図 11号住居跡

り込んでいる。遺物 床面から土師器の坏、甕の破片が出土している。滑石は、白玉の未製品が2点（穿孔加工したものを第20図4に図示）、その他板状に一次加工した滑石素材、剥片・チップ計6点が出土している。滑石の総量は222gである。所見 遺構の形態と出土遺物から見て、古墳時代後期の6世紀後半頃の住居跡と考えられる。



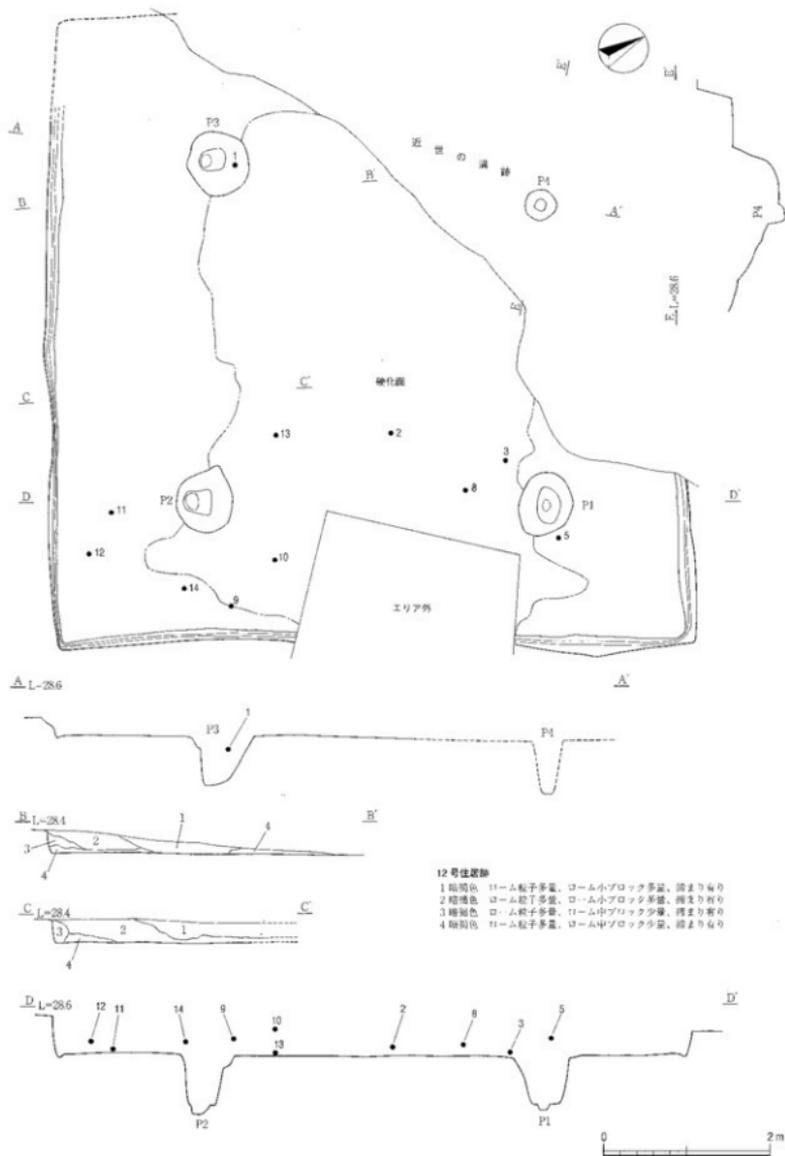
第20図 11号住居跡出土遺物

表9 11号住居跡出土遺物観察表

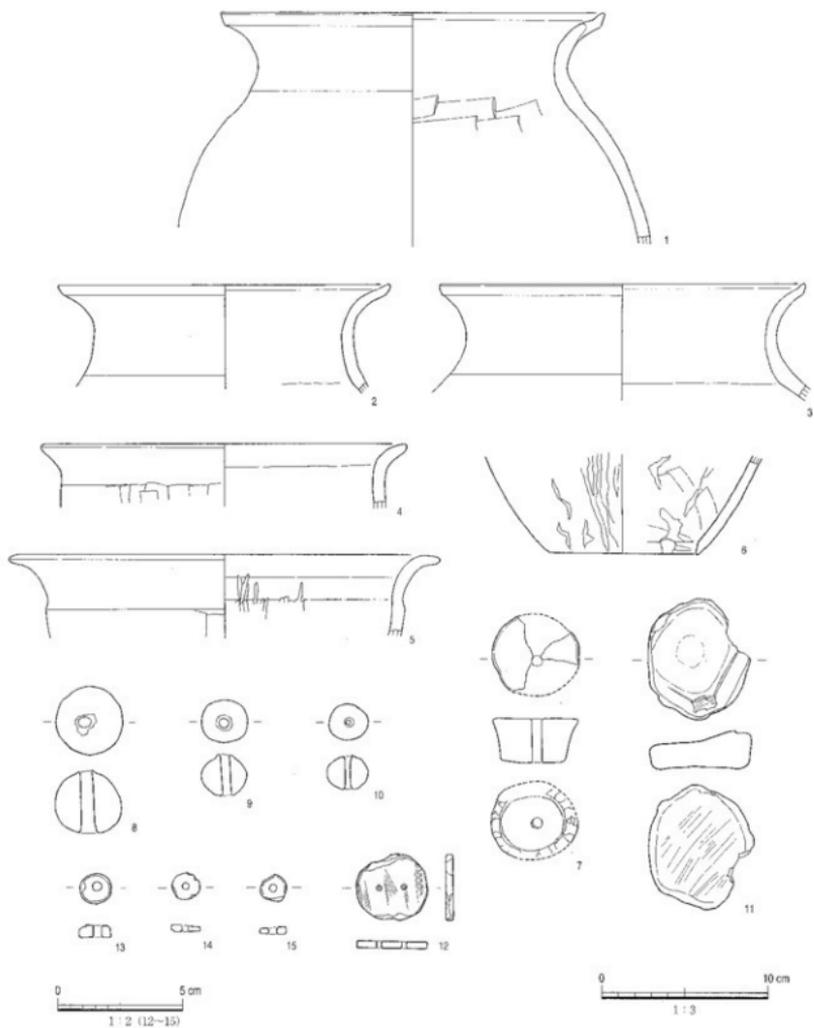
品目番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	坏	14.0	4.6	-	白色瓷、石英細粒、海綿骨針	赤褐色	良好	底部でいねいなヘラケズリ、内外面赤彩。	
2	土師器	甕	(18.4)	-	-	石美、白色粒、褐色小粒	にぶい橙色	良好	口縁部外面雷頭状、胴部外面ヘラナゲ。	
3	土師器	甕	(18.0)	-	-	白色瓷、石英細粒、褐色粒	橙色	良好	口縁部内外面コナゲ。	
4	石製模造品	白玉	径0.7	高0.35	孔径0.15	重0.26g	滑石質			未製品

## 12号住居跡 (第21・22図)

位置 調査区の南西部G22～G23グリッドにある。規模と平面形 7.7×(7.68)m 主軸方向 N-17°-1°W 壁 壁は約30cm残存している。重複関係 11・14号住居跡よりも新しい。床 4本支柱穴の内側が硬化している。北西側は近世の溝跡によって削られている。ピット 4箇所。P1～P4は支柱穴で、深さ60～74cm。カマド 覆土 壁近くの2～3層はロームブロックを大量に含んでいる。遺物 覆土から土師器の甕が、P3の抜き取り穴から1の土師器甕が出土している。出土している土師器の甕類は、いずれも口縁部をわずかに摘み上げる常総形甕の特徴を持っている。石製模造品は図示した白玉と双孔円盤の他に、大きさ約7×5cm、重さ123gの滑石原石、四角形や多角形に荒割りした白玉素材14点、3g、剥片・チップ42点、51gが出土している。砥石として使用されたと思われる軽石が床面から見つかっている。所見 覆土の2～3層は人為的な埋め戻し層と考えられる。土師器甕に常総形甕の特徴が見られることや、他住居との切り合い関係から見て、古墳時代後期の6世紀後半以降の住居跡と考えられる。



第21図 12号住居跡



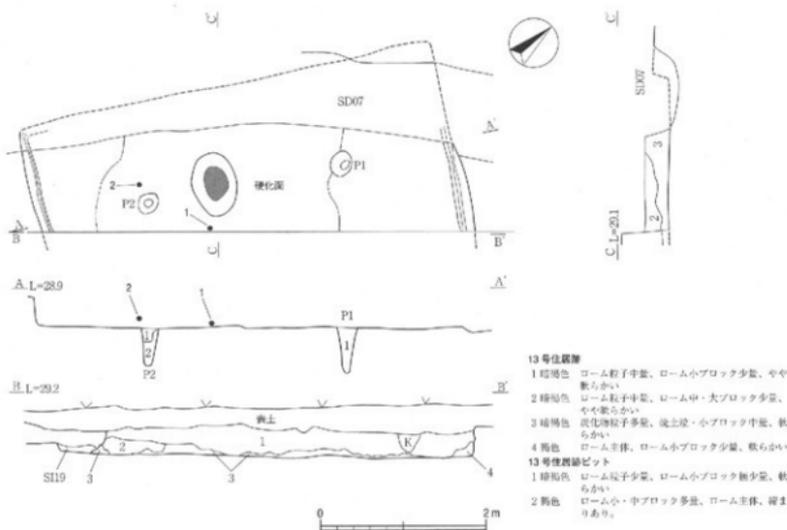
第22图 12号住居跡出土遺物

表10 12号住居跡出土物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	甕	22.5	-	-	石英、雲母	橙色	普通	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ。	
2	土師器	甕	(20.0)	-	-	石英、雲母、長石	にぶい橙色	良好	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。	
3	土師器	甕	(22.0)	-	-	石英、長石、雲母	にぶい橙色	普通	口縁部内外面ヨコナデ。	
4	土師器	甕	(22.0)	-	-	石英、長石、雲母	褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	
5	土師器	甕	(26.4)	-	-	石英・長石微粒	橙色	良好	胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ミガキ。	
6	土師器	甕	-	-	(9.0)	白色微粒	褐色	良好	胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ後一部ミガキ。	
7	土製品	紡錘車	上径5.2 下径3.8	孔径0.6	高2.7	重51.0g				
8	土製品	土玉	径4.0 厚3.8	孔径0.9		重55.1g				
9	土製品	土玉	径2.8 厚2.5	孔径0.55		重16.3g				
10	土製品	土玉	径2.3 厚2.1	孔径0.4		重9.5g				
11	石製品	砥石	長7.4 幅6.1 厚2.3		重27.0g				靱石製	
12	石製模造品	双孔円盤	長2.80 幅2.95 厚0.41		重4.94g				滑石製	
13	石製模造品	白玉	径1.25 高0.5	孔径0.3		重1.13g			滑石製	
14	石製模造品	白玉	径1.2 高0.25	孔径0.25		重0.45g			滑石製	
15	石製模造品	白玉	径1.1 高0.3	孔径0.35		重0.47g			滑石製	

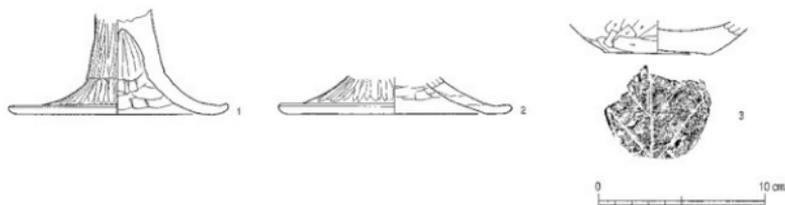
## 13号住居跡 (第23・24図)

位置 調査区の南西部G24グリッドにある。規模と平面形 5.1×-m 主軸方向 N-63°-W 壁 環



第23図 13号住居跡

は約28cm残存している。**重複関係** 7号溝跡よりも古い。**床** 主柱穴の内側から、炉かカマドの火床面の北側にかけて硬化している。北西側は溝跡によって削られている。**ピット** 2箇所。P1、P2は主柱穴で、深さ44～54cm。**炉** 74×53cmの楕円形の範囲で、中央部は赤変硬化している。**覆土** ロームブロックを主体とした堆積で、炭化物や焼土粒を含んでいる。**遺物** 覆土や床面から土師器の高坏が出土している。**所見** 床面から出土している炭化材や焼土から焼失家屋と考えられ、覆土は、人為的な埋め戻しと考えられる。炉を持つことと、土師器の高坏の形態から古墳時代中～後期の5世紀後半頃の住居跡と考えられる。



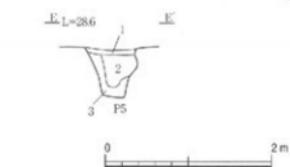
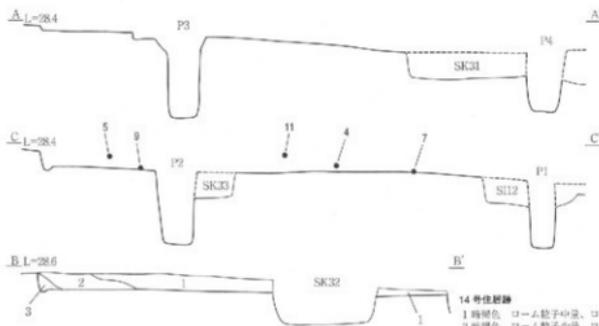
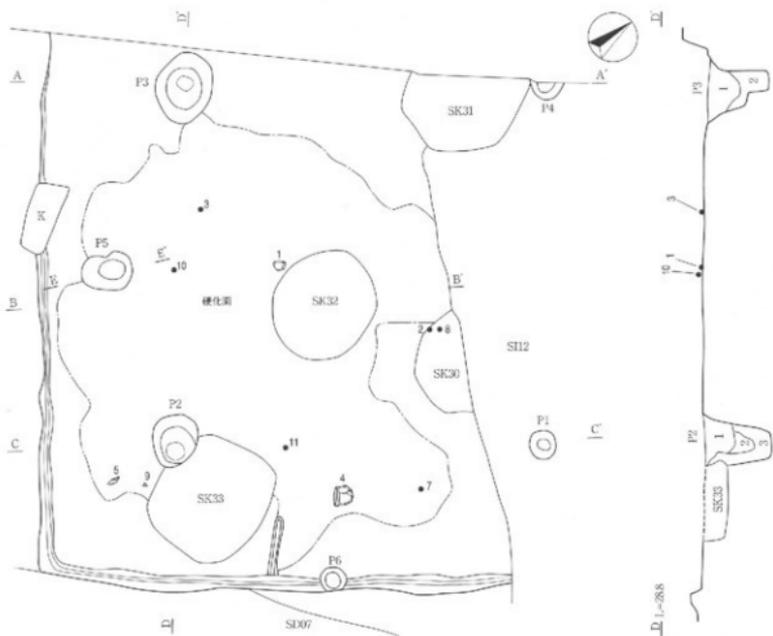
第24図 13号住居跡出土遺物

表11 13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色面	焼成	特徴	備考
1	土師器	高坏	-	-	13.2	白色粒、石英粒	赤褐色	良好	脚部外面ヘラミガキ	
2	土師器	高坏	-	-	(14.0)	白色粒、石英粒	にぶい橙色	良好	脚部外面ヘラミガキ	
3	土師器	欠	-	-	6.4	白色粒、石英粒、海綿骨針	赤褐色	良好	底部木炭痕。胴部外面ヘラクスリ、内面ナデ。	

#### 14号住居跡 (第25・26図)

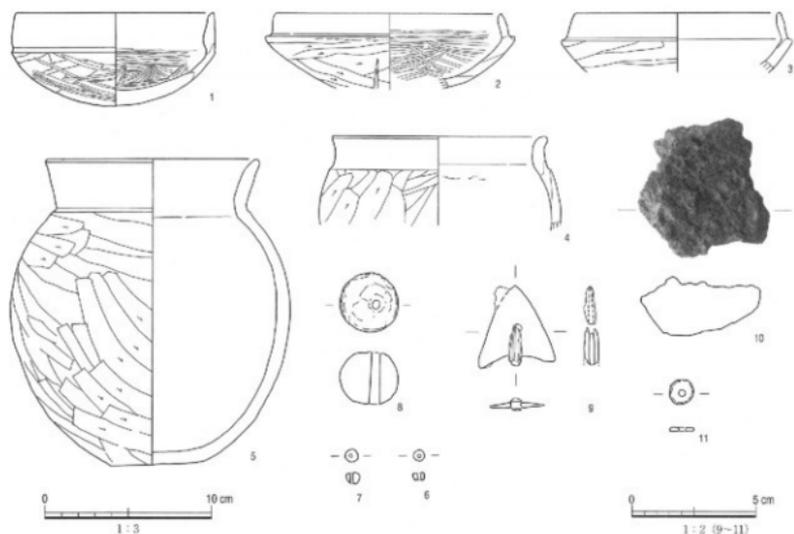
**位置** 調査区の南西部 G23 グリッドにある。**規模と平面形** 一辺6.5m以上の方形か。**主軸方向** N-46°-E **壁** 壁は約18cm残存している。**重複関係** 12号住居跡よりも古い。**床** 主柱穴の内側から、P5付近にかけて硬化している。**ピット** 6箇所。P1～P4は主柱穴で、深さ76～91cm。**火所** **覆土** ローム小ブロックを主体とした堆積で締まりがある。**遺物** 覆土や床面から土師器の坏や甕が出土している。床面からは、木質痕を残す三角形の鍬が出土している。滑石関係は、重さ18gの小原石、未製品1点、加工途中の破損品2点、平に板状化した素材片8点が出土している。**所見** 覆土は、人為的な埋め戻しと考えられる。大型住居跡で、土師器坏の形態から古墳時代後期の6世紀中頃の住居跡と考えられる。



14 居住層跡

- 1 褐色 rome 粒子中量、rome 小ブロック中量、緑まり有り
  - 2 褐色 rome 粒子少量、rome 小ブロック少量、緑まり有り
  - 3 褐色 rome 粒子少量、rome 小ブロック少量、緑まり有り
- 14 居住層跡ピット P2
- 1 褐色 rome 粒子中量、rome 小ブロック中量、やや緑少ない
  - 2 褐色 rome 粒子中量、rome 小・中ブロック中量、緑少ない
  - 3 褐色 rome 主体、rome 小・中ブロック少量、緑少ない
- 14 居住層跡ピット P3
- 1 緑褐色 rome 粒子多量、rome 小・中ブロック中量、緑少ない
  - 2 緑褐色 rome 粒子多量、rome 小・中ブロック多量、緑まり有り
- 14 居住層跡ピット P5
- 1 緑褐色 rome 小・中ブロック少量、緑まり有り
  - 2 緑褐色 rome 小ブロック少量、緑少ない
  - 3 緑褐色 rome 小・中ブロック多量、やや緑少ない

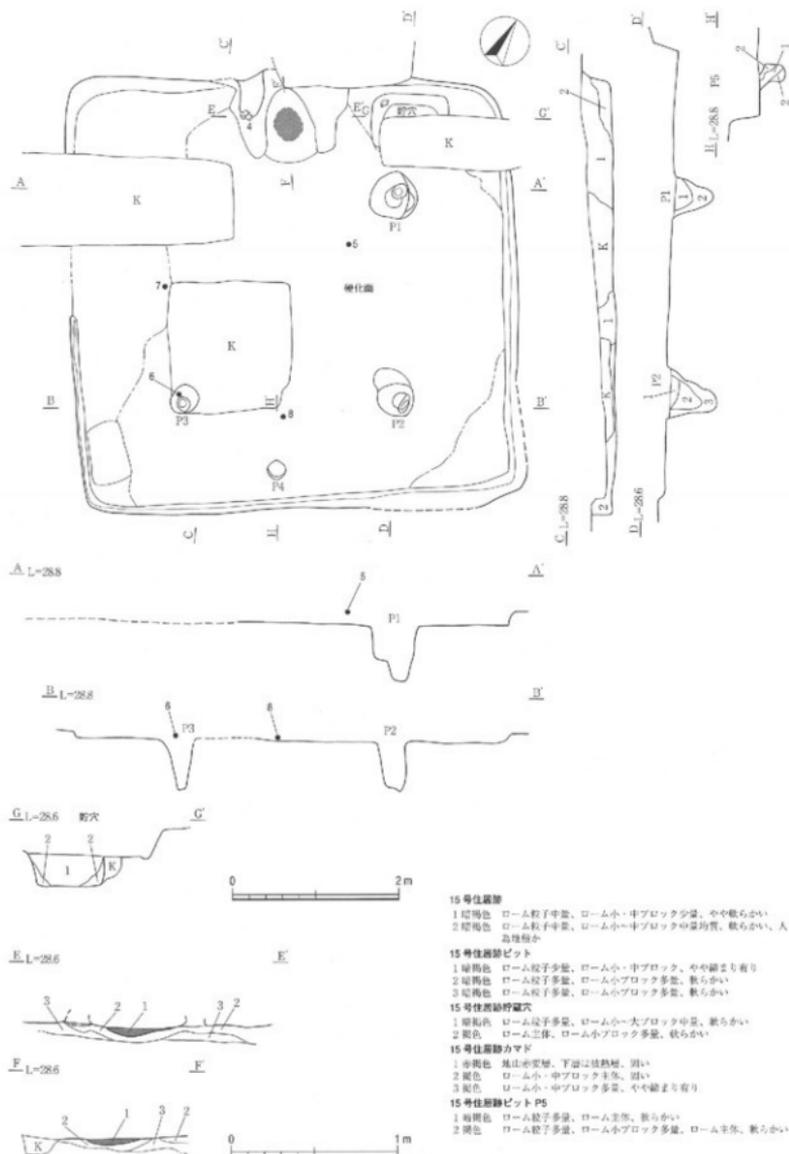
第 25 図 14 号住居跡



第26図 14号住居跡出土遺物

表12 14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土器器	坏	120	5.6	-	白色粒、石英細粒	にぶい黄色	良好	底部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	
2	土器器	坏	134	-	-	白色粒、赤母細粒多量	にぶい赤褐色	良好	底部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	
3	土器器	坏	(125)	-	-	白色細粒、漆樹骨針	にぶい褐色	良好	口縁部内外面ヨコナテ、底部ヘラケズリ。	
4	土器器	小型甕	(134)	-	-	白色粒、石英細粒	にぶい褐色	良好	口縁部内外面ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ。	
5	土器器	甕	130	186	5.5	白色粒、石英、褐色粒	明赤褐色	良好	口縁部内外面ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	
6	土製品	小玉	径0.7	高0.45	孔径0.2	重0.26g				
7	土製品	土玉	長0.8	幅0.7	孔径0.11	重0.38g				
8	土製品	土玉	長3.1	幅3.6	孔径0.6	重38.00g				
9	鉄製品	鉄鏃	長2.3	幅3.1	厚0.2	孔径0.37	重3.00g			
10	鉄滓		縦長5.0	横長5.0	高2.1	重66.00g			縦状浮紋片	
11	石製模造品	白玉	径1.0	高0.20	孔径0.25	重0.42g	滑石製			



15号住居跡

- 1 柱跡色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック少量、やや散らかり
- 2 柱跡色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック中量均質、散らかり、入高性弱

15号住居跡ピット

- 1 埋跡色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック、やや細まり有り
- 2 埋跡色 ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、散らかり
- 3 埋跡色 ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、散らかり

15号住居跡貯蔵穴

- 1 埋跡色 ローム粒子多量、ローム小・大ブロック中量、散らかり
- 2 埋跡色 ローム主体、ローム小ブロック多量、散らかり

15号住居跡方マド

- 1 埋跡色 基土赤褐色、下部は粒熟砂、強い
- 2 埋跡色 ローム小・中ブロック主体、強い
- 3 埋跡色 ローム小・中ブロック多量、やや細まり有り

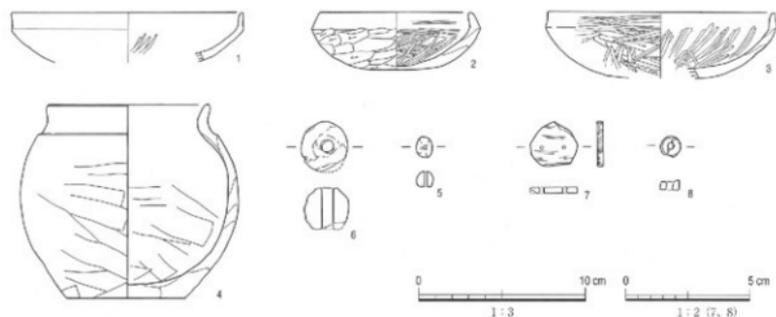
15号住居跡ピット P6

- 1 埋跡色 ローム粒子多量、ローム主体、散らかり
- 2 埋跡色 ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、ローム主体、散らかり

第27図 15号住居跡

### 15号住居跡 (第27・28図)

**位置** 調査区の南西部 G24 グリッドにある。 **規模と平面形** 5.42 × 5.17m の方形 **主軸方向** N-18° - W **壁** 壁は約 36cm 残存している。 **床** 住居隔部の硬化が弱い。西側は耕作による削平で硬化面が残存していない。 **ピット** 4箇所。P 1 ~ P 3 は主柱穴で、深さ 61 ~ 69cm。カマド脇に貯蔵穴を持つ。 **カマド** 袖部幅 1.45m、袖部奥行き 1.05m、燃烧室幅 0.59m、奥行き 0.88m。赤変硬化した火床面はかまど燃烧室の中央にある。 **覆土** 壁際の下層の堆積はローム小ブロックを主体として軟らかい。 **遺物** 覆土や床面から土師器の坏や小型甕、土製品の土玉、滑石製品の双孔円盤が出土している。床面からは、白玉が出土している。その他の図示しなかった滑石は、荒割りした割片 6点、白玉や剣形、その他素材片が 16点と剣形の破損品が 1点出土している。 **所見** 覆土は、人為的な埋め戻しと考えられる。土師器坏の形態から古墳時代後期の 6 世紀後半頃の住居跡と考えられる。



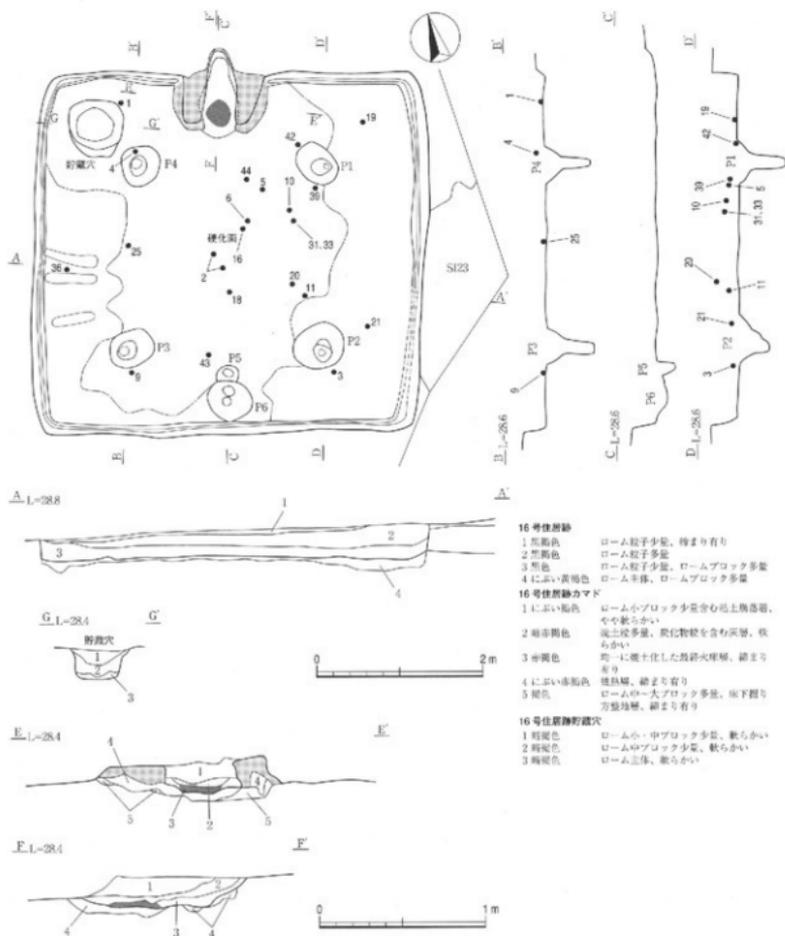
第28図 15号住居跡出土遺物

表13 15号住居跡出土遺物観察表

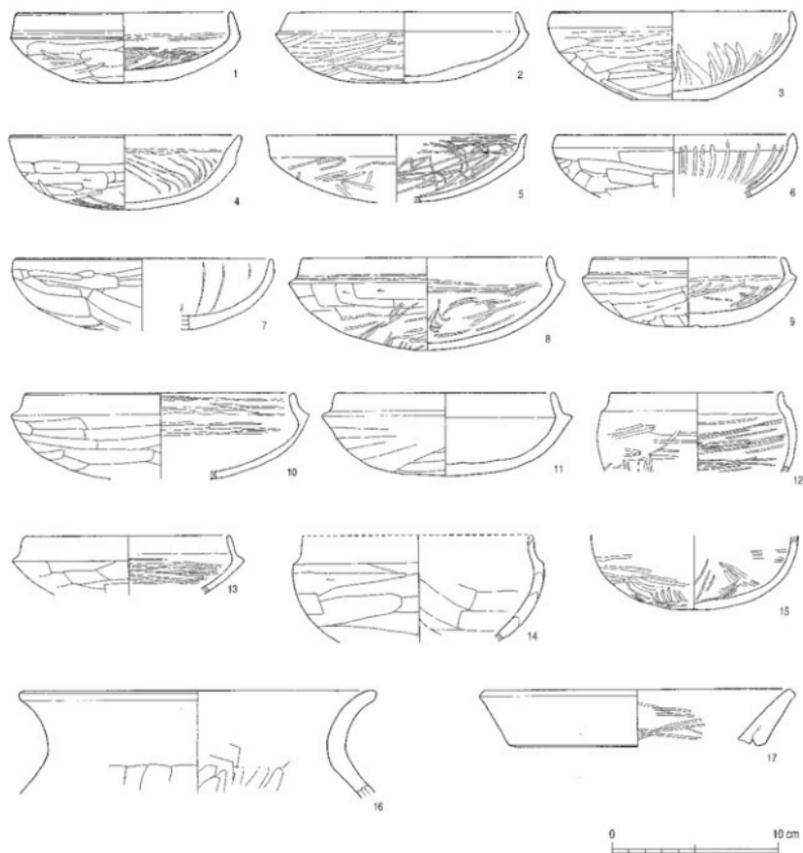
図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	坏	φ14.0	-	-	石英粒、雲母	におい・橙色	良好	口縁部内外面コナテ、胴部外面ヘラケズリ。内面ミガキ、黒色処理。	
2	土師器	坏	φ9.6	3.5	-	白色細粒多量	浅黄色	良好	底部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	
3	土師器	坏	13.6	-	-	白色粒、雲母細粒多量	黒褐色	良好	体部内外面ミガキ。	内外面黒色処理
4	土師器	甕	φ9.6	11.7	7.9	白色粒、雲母細粒多量	赤褐色	良好	口縁部内外面コナテ、胴部外面ヘラケズリ。	
5	土製品	土玉	径1.3	厚0.9	孔径0.2	重1.12g				
6	土製品	土玉	径3.0	厚2.5	孔径0.7	重15.73g				
7	石製標識品	双孔円盤	径1.9	高1.8	孔径0.1	重1.73g	滑石製			
8	石製標識品	白玉	径0.8	厚0.45	孔径0.25	重0.38g	滑石製			

### 16号住居跡 (第29・30図)

**位置** 調査区の南西部 F24 グリッドにある。 **規模と平面形** 4.74 × 4.35m の方形 **主軸方向** N-16°-E **壁** 壁は約 32cm 残存している。 **床** 住居中央部から貯蔵穴のある北西隅部が硬化している。 **ピット** 6箇所。 P 1 ~ P 4 は主柱穴で、深さ 34 ~ 55cm。住居北西隅に貯蔵穴を持つ。 **カマド** 袖部幅 1.14m、袖部奥行き 0.73m、燃焼室幅 0.49m、奥行き 0.94m。赤変硬化した火床面はカマド燃焼室の前寄りの位置に

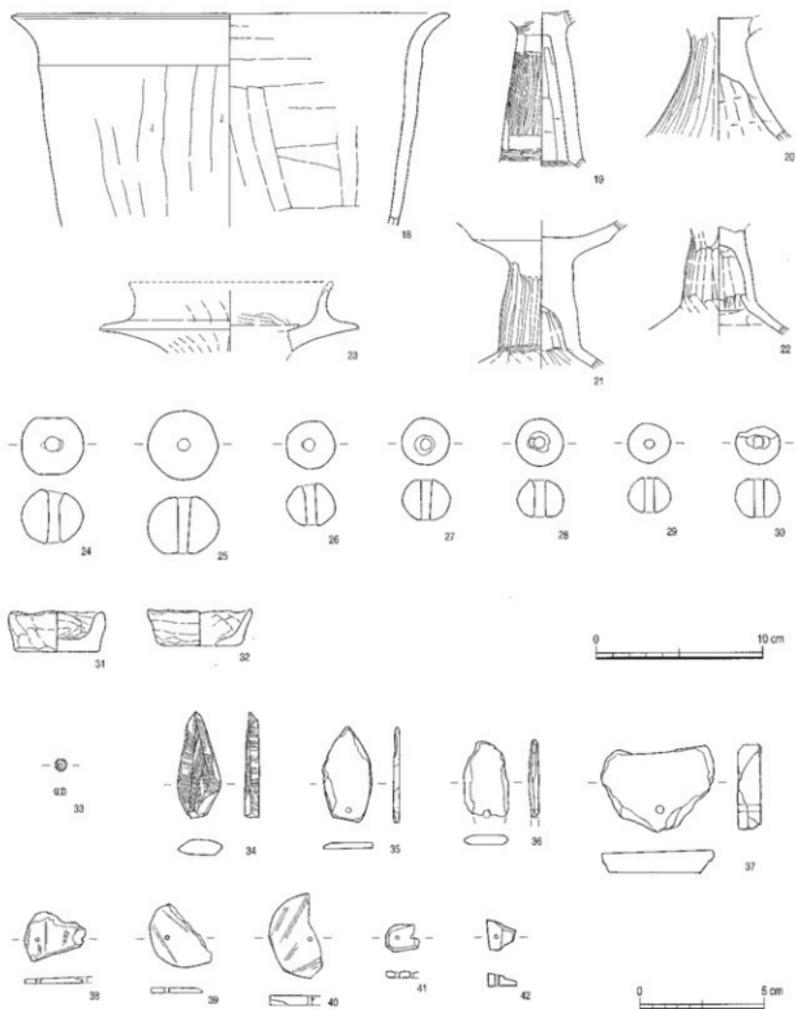


第29図 16号住居跡



第30図 16号住居跡出土遺物1

ある。覆土 壁際の下層の地積はロームブロックを主体としている。遺物 覆土や床面から土師器の高坏や甌、土玉、手捏ね土器、石製模造品等が出土している。滑石の総量は430gと多く、図示した製品・未製品・破損品の他に刺形・円盤・白玉の調整加工前の大きさとおおよその形をそろえた素材片が18点、剥片とチップが70点出土している。所見 覆土中の遺物は、5世紀末頃の高坏、6世紀中頃の土師器坏、土製品や石製模造品、未製品まで含む、土師器の坏は体部内面と外面にも一部ミガキを施す丁寧な作りの坏である。土師器坏の形態や住居の貯蔵穴の位置等から古墳時代後期の6世紀中頃以降の住居跡と考えられる。滑石製作にかかわる剥片・チップの出土量が多い点は注目される。



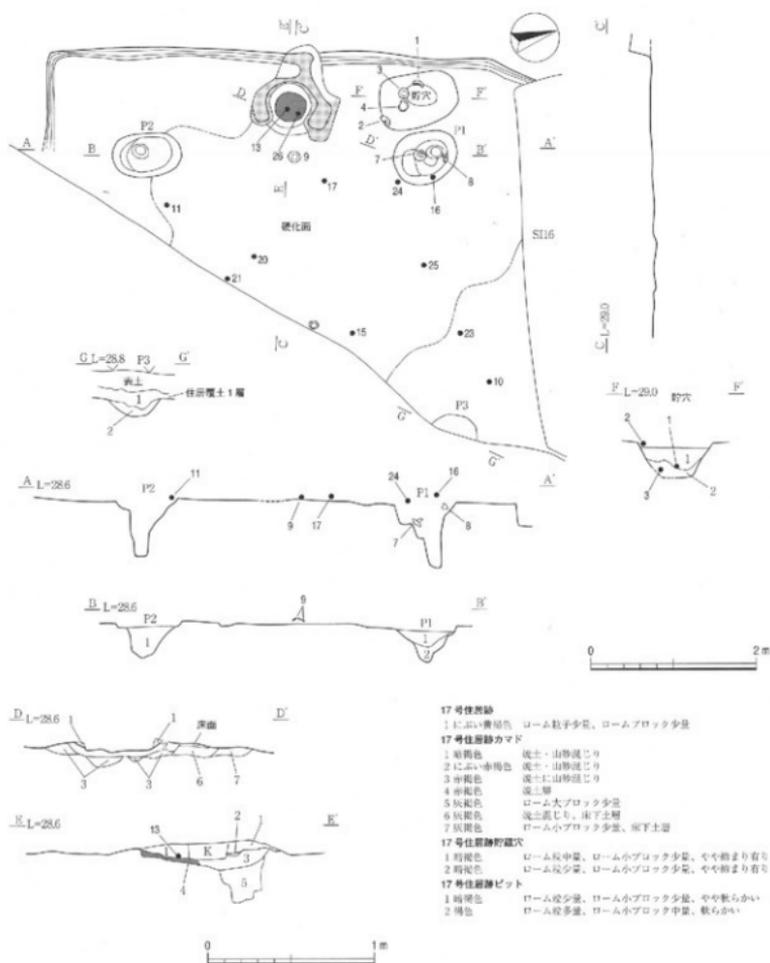
第 31 图 16 号住居跡出土遺物 2

表14 16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	容種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	坏	129	43	-	白色粒、雲母細粒	明赤褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ後部分ミガキ、内面ミガキ。	
2	土師器	坏	139	43	-	石灰、雲母、チャート	にぶい黄褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、内面ナデ。	
3	土師器	坏	146	54	47	雲母細粒、石灰、褐色粒	にぶい黄褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、内面ナデ。	
4	土師器	坏	(148)	45	-	石灰、薄綿骨針	明赤褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	
5	土師器	坏	156	-	-	石灰	明赤褐色	良好	体部内外面ミガキ。	
6	土師器	坏	(142)	-	-	石灰	にぶい黄褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面放射状ミガキ。	
7	土師器	坏	(156)	-	-	石灰	褐色	良好	体部外面ヘラケズリ、内面まばらなミガキ。	
8	土師器	坏	148	55	-	白色粒	明赤褐色	普通	体部内外面ミガキ。	
9	土師器	坏	(115)	42	-	雲母、薄綿骨針	にぶい褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	
10	土師器	坏	(162)	-	-	石灰	褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ、内面ミガキ。	
11	土師器	坏	129	50	-	角閃石、暗赤褐色粒	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラケズリ後丁寧なヘラケナデ。	
12	土師器	坏	104	-	-	石灰	灰褐色	良好	体部内外面ミガキ。	
13	土師器	坏	(124)	-	-	石灰	明赤褐色	良好	体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	
14	土師器	坏	-	-	-	石灰	明赤褐色	良好	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
15	土師器	坏	-	-	-	織紗粒	にぶい褐色	良好	体部内外面ミガキ。	
16	土師器	甕	(21.5)	-	-	石灰、白色粒	褐色	普通	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
17	土師器	壺	(18.4)	-	-	白色粒、赤褐色粒	褐色	良好	口縁部内外面ヘラケナデ後内面一部ミガキ。	
18	土師器	甕	(26.4)	-	-	金雲母、石灰、白色粒	にぶい褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	
19	土師器	高坏	-	-	-	石灰、白色粒	褐色	良好	胴部外面ミガキ、内面ヘラケズリ。	
20	土師器	高坏	-	-	-	石灰、白色粒	褐色	良好	胴部外面ミガキ、内面指ナデ。	
21	土師器	高坏	-	-	-	石灰、白色粒、赤褐色粒	赤褐色	良好	胴部外面ミガキ、内面指ナデ。	
22	土師器	高坏	-	-	-	石灰、白色粒、断赤褐色粒	褐色	良好	胴部外面ミガキ、内面指ナデ。	
23	土師器	裝飾高坏	-	-	-	石灰、長石、白色粒	褐色	良好	受付部~胴部外面ヘラナデ、受付部内面ミガキ。	
24	土製品	土圭	径37	高32	孔径1.1	重39.0g				
25	土製品	土圭	径43	高34	孔径0.8	重60.0g				
26	土製品	土圭	径30	高25	孔径0.8	重17.0g				
27	土製品	土圭	径32	高24	孔径0.7	重17.0g				
28	土製品	土圭	径29	高23	孔径1.0	重16.0g				
29	土製品	土圭	径26	高21	孔径0.6	重12.0g				
30	土製品	土圭	径27	高23	孔径5.5	重13.0g				
31	土師器	手捏土器	5.6	24	5.0	石灰、半透明の赤色粒	明赤褐色	良好	底部無調整。体部内外面指ナデ。	
32	土師器	手捏土器	6.4	22	5.0	石灰	にぶい褐色	良好	底部ヘラナデ。体部外面ヘラナデ、内面指ナデ。	
33	石製模造品	臼玉	径0.45	高0.3	孔径0.2	重0.12g	滑石製			
34	石製模造品	削形	幅1.75	長4.2	厚0.5	重6.00g	滑石製			
35	石製模造品	削形	幅1.9	長3.9	厚0.25	重3.94g	滑石製			
36	石製模造品	削形	幅1.75	長3.1	厚0.4	重4.02g	滑石製			
37	石製模造品	削形	幅1.5	長3.5	厚0.9	重17.93g	滑石製			
38	石製模造品	双孔円盤	幅2.4	高一	孔径	重201g	滑石製			
39	石製模造品	双孔円盤	幅2.1	高一	孔径0.1	重2.44g	滑石製			
40	石製模造品	有孔円盤	幅1.9	高3.4	厚0.4	重4.36g	滑石製			
41	石製模造品	双孔円盤	幅1.4	高1.1	孔径-	重0.70g	滑石製			
42	石製模造品	臼玉	幅1.15	高0.55	孔径0.15	重0.89g	滑石製			未製品

### 17号住居跡 (第32・33図)

**位置** 調査区の南西部 F25 グリッドにある。 **規模と平面形** — 主軸方向 N-73°-W 壁 壁はほとんど残存していない。 **床** 住居中央部から貯蔵穴のある北西隅部とカマドの前面が硬化している。 **ピット** 3箇所。P1～P3は主柱穴で、深さ68～76cm。住居北西隅とカマドの間に貯蔵穴を持つ。 **カマド**



#### 17号住居跡

1にふいかけ色 ローム粒子少量、ロームブロック少量

#### 17号住居跡カマド

- 1 暗褐色 灰土・山砂混じり
- 2 にふいかけ色 灰土・山砂混じり
- 3 中褐色 灰土・山砂混じり
- 4 赤褐色 灰土層
- 5 灰褐色 ローム大ブロック少量
- 6 灰褐色 灰土混じり、床下土層
- 7 灰褐色 ローム小ブロック少量、床下土層

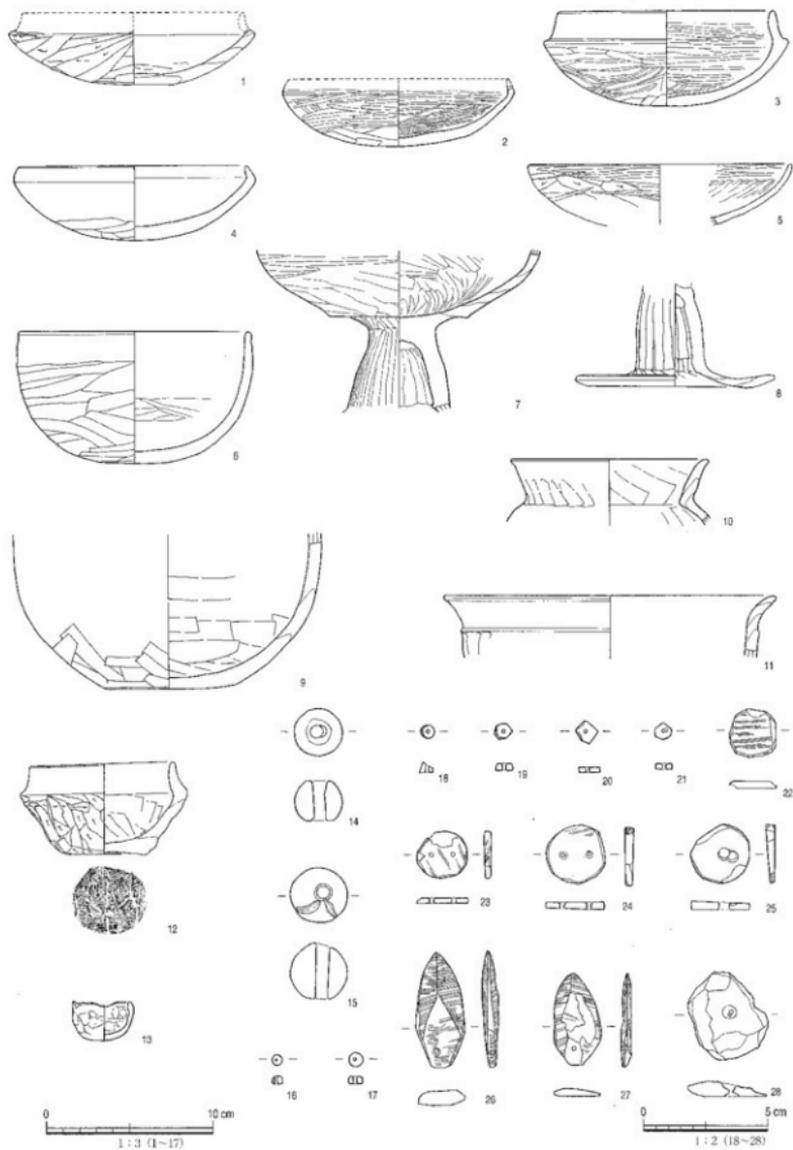
#### 17号住居跡貯蔵穴

- 1 暗褐色 ローム粒中量、ローム小ブロック少量、やや粘り有り
- 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、やや粘り有り

#### 17号住居跡ピット

- 1 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、やや粘り有り
- 2 褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック中量、粘り有り

第32図 17号住居跡



第33圖 17号作厝跡出土遺物

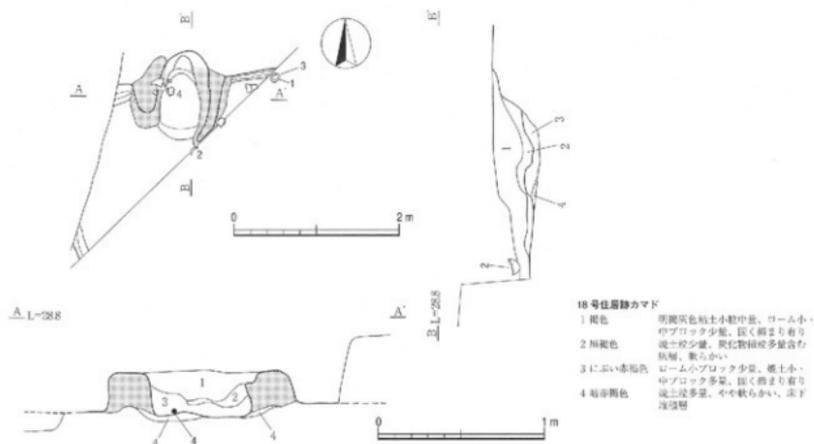
西壁中央部にあり、袖部幅1.04m、袖部奥行き1.03m、燃烧室幅0.53m、奥行き0.63m。赤変硬化した火床面はカマド燃烧室の中央の位置にある。覆土 — 遺物 貯蔵穴から土師器の坏が、カマド燃烧室中央部からは伏せた手控土器が、P1の覆土からは土師器の高坏が出土している。石製模造品関係は白玉、剣型、双孔円盤の製品も見られるが、未製品や途中破棄品も含む。その他に縦長の剥片89g、15点、剥片・チップ58g、48点等が出土している。滑石の総量は280gである。所見 貯蔵穴出土遺物は、6世紀中頃以降の土師器坏で、P1覆土出土の高坏は、5世紀末から6世紀初め頃のものと思われる。住居の貯蔵穴の位置や出土遺物等の形態から古墳時代後期の6世紀後半頃の住居跡と考えられる。

表15 17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	坏	-	-	48	石英、雲母微粒	黒色	良好	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。内外面黒色処理か。	
2	土師器	坏	(13.4)	(3.9)	-	微砂粒、海綿骨針	褐色	良好	体部内外面ミガキ。底部外面ヘラケズリ。	
3	土師器	坏	(12.8)	5.8	-	微砂粒	暗褐色	良好	体部内外面ミガキ。底部外面ヘラケズリ。	
4	土師器	坏	13.7	4.5	-	雲母	黒褐色	良好	体部上半部ナデ、底部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	
5	土師器	坏	(16.0)	-	-	雲母、海綿骨針	茶褐色	良好	体部外面ヘラケズリ後荒いミガキ、内面ミガキ。内外面出色処理。	
6	土師器	坏	(13.8)	8	-	微砂粒	明赤褐色	良好	口縁部内外面ヨコナデ。	
7	土師器	高坏	-	-	-	白色粒、石英粒、褐色粒	浅黄色	良好	坏部内外面・脚部外面ミガキ。	
8	土師器	高坏	-	-	(12.0)	石英、褐色細粒多量	赤褐色	良好	脚部外面ヘラケズリ、底部内面ヘラナデ、底部赤彩。脚部内面無調整。	
9	土師器	壺	-	-	7.6	雲母	明赤褐色	良好	胴部外面ナデ、下部部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
10	土師器	甕	(12.0)	-	-	白色粒、石英粒、雲母、褐色粒	褐色	良好	口縁部内外面ヘラナデ。	
11	土師器	甗	(20.0)	-	-	白色、石英、雲母、褐色細粒	赤褐色	良好	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ。	
12	土師器	小煎鉢	8.6	5.6	5.2	白色粒、石英粒多量	褐色	良好	底部小変直、体部外面ヘラケズリ、内面下半部ヘラナデ、内面上半部口縁部外面ヨコナデ。	
13	ミニチュア土器	手押	3.6	2.4	-	白色微砂粒	にぶい黄褐色	良好	丸底、輪彩状。指溝痕。	
14	土製品	土玉	径2.8	高2.4	孔径0.9	重20.0g				
15	土製品	土玉	径3.4	高3.4	孔径0.9	重35.0g				
16	土製品	小玉	径0.7	高0.5	孔径0.1	重0.28g				
17	土製品	小玉	径0.9	高0.5	孔径0.2	重0.33g				
18	石製模造品	白玉	径0.55	高0.4	孔径0.15	重0.15g	滑石製			
19	石製模造品	白玉	径0.7	高0.3	孔径0.15	重0.20g	滑石製			
20	石製模造品	白干	径0.9	高0.3	孔径0.15	重0.25g	滑石製			
21	石製模造品	白干	径0.65	高0.25	孔径0.1	重0.29g	滑石製			
22	石製模造品	有孔円盤	径1.9	高1.9	厚0.35	重2.46g	滑石製			
23	石製模造品	双孔円盤	径2.1	高1.9	孔径0.1	重2.01g	滑石製			
24	石製模造品	双孔円盤	径2.4	高2.4	孔径0.1	重3.72g	滑石製			
25	石製模造品	有孔円盤	径2.6	高2.4	孔径0.4	重3.59g	滑石製			
26	石製模造品	劍形	径2.0	長1.65	厚0.6	重7.00g	滑石製			
27	石製模造品	劍形	径1.9	高0.35	厚0.35	重3.54g	滑石製			
28	石製模造品	有孔円盤	径3.2	高3.4	孔径0.1	重8.72g	滑石製			

### 18号住居跡 (第34・35図)

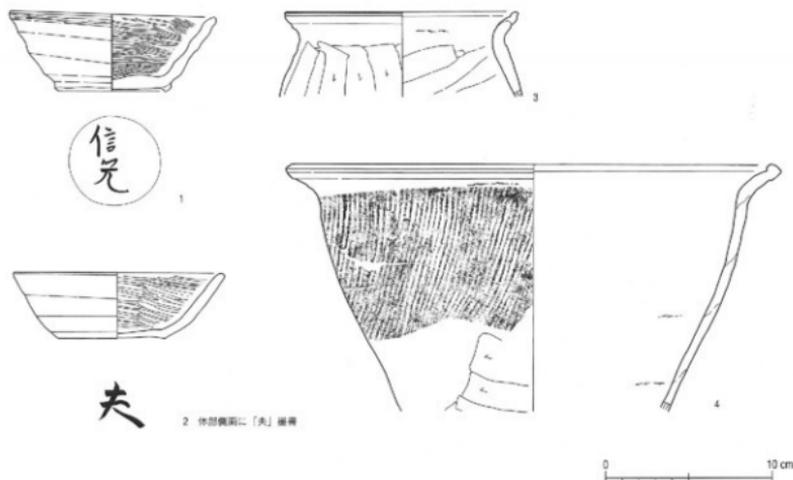
**位置** 調査区の南西部F25グリッドにある。 **規模と平面形** — 主軸方向 N-6°-W 壁 壁は約30cm残存している。 **床** 調査している部分については全体に硬化している。 **ピット** — カマド 北壁にあり、袖部幅1.17m、袖部奥行き0.7m、燃焼室幅0.47m、奥行き0.83m。火床面はほとんど赤変せず、カマド燃焼室内には側壁や天井部から落下した焼上や粘土が堆積し、最下層に薄く炭化物微粒を大量に含むカマド灰層が堆積している。 **遺物** 覆土中から内黒土師器の坏で、墨書土器が2点出土している。1は高台部が破損し、底部に「信□」が、2は体部側面に「夫」の文字が書かれている。 **所見** 全体に出土遺物は、9世紀後葉頃のものと思われる。住居跡の時期を示すものである。



第34図 18号住居跡

表16 18号住居跡出土遺物観察表

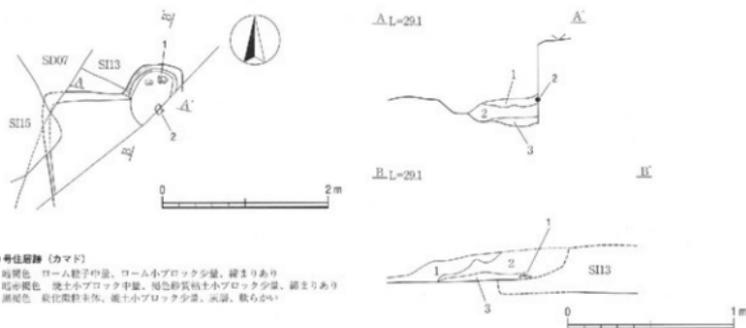
区画番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	高台付坏	125	-	-	石英、雲母、褐色微粒、白色粒	棕色	良好	内面黒色処理、ミガキ、底部回転ヘラケズリ。底面「信□」無青	墨書土器
2	土師器	坏	128	4	6.5	粘土・石英・雲母	浅灰色	良好	底部回転糸切り。体部側面に「夫」墨書	墨書土器
3	土師器	甕	(140)	-	-	石英、雲母細粒多量	にぶい褐色	良好	口縁部内外面コナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラケデ	
4	須恵器	甕	(296)	-	-	石英、雲母粒、白色粒	暗灰色	良好	外面縦方向縦格子状平行叩き、鉢形の甕。	



第35図 18号住居跡出土遺物

### 19号住居跡 (第36・37図)

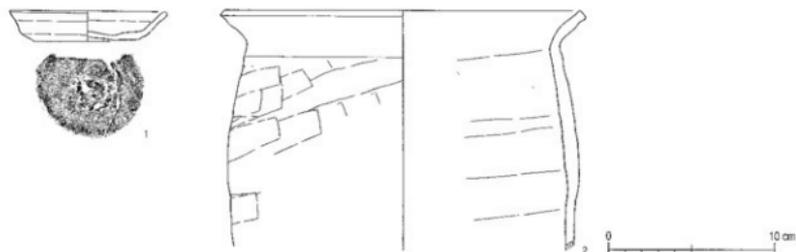
**位置** 調査区の南西部G24グリッドにある。**規模と平面形** — 主軸方向 N-1°-W 壁 壁は約35cm残存している。**床** 全体にやや軟質である。**ピット** — カマド 北壁にある。右袖が調査区外に伸びており規模は不明である。火床面はほとんど赤変せず、カマド燃焼室内には側壁や天井部から落下した焼土や褐色砂質粘土が堆積し、最下層にカマド灰層が堆積している。**遺物** カマド覆土中から土師器の甕、小皿が出土している。**所見** 出土遺物は、10世紀中頃のものと思われる。



#### 19号住居跡 (カマド)

- 1 褐色色 コーム粒子中量、フォーム小ブロック少量、礫残りあり
- 2 灰中褐色 焼土小ブロック中量、褐色砂質粘土小ブロック少量、礫残りあり
- 3 黒褐色 炭化炭粉主体、焼土小ブロック少量、灰層、礫残りあり

第36図 19号住居跡



第37図 19号住居跡出土遺物

表17 19号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師器	小皿	9.6	1.9	6.3	石英微粒、白色粒	にぶい橙色	良好	底部阿杯ヘラ切り難し。ロクロ石 回転。	
2	土師器	甕	(22.0)	-	-	石英粒、チャート 粒、海綿骨針、白 色粒	赤褐色	良好	口縁部内外面ココナテ、胴部外面 斜位のヘラナゲ後押さえ、内面ヘ ラナゲ。	

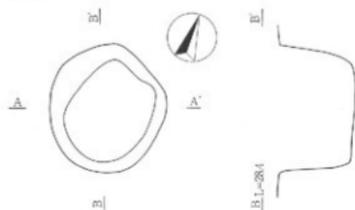
## 第2節 土坑・井戸跡

調査区内からは、28基の土坑が確認されている。出土遺物から時期の明瞭なものは、2・5・11・32号土坑である。2号土坑からは縄文時代の浮島式土器が出土しており縄文時代前期、5号土坑は、大型で長方形の粘土貼り土坑で、中世のものと思われる。32号土坑は、古墳時代の住居跡を切っていることと、平安時代の土器の細片がわずかにみられることから平安時代の土坑と見られる。32号土坑からは馬具金具の紋具と見られるものが出土している。6・29号土坑は円形の粘土貼り土坑で近世の墓坑の可能性が考えられる。11号土坑は渡来銭が出土し、中世以降の時期と見られる。その他に陶磁器片や覆土の観察から、近世以降の耕作に伴う攪乱土坑と思われる穴や樹木の根の穴になるとと思われる穴もある。表18に概要をまとめている。その他に井戸跡と見られる大型遺構が1基確認されているが遺物は出土していない。土坑・ピット群と同時期頃の中世後半代のものと思われる。



第38図 2号土坑出土遺物

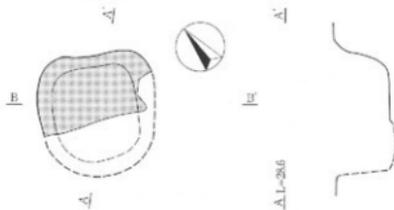
SK02



## 2号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量、ローム小・中ブロック少量、粘まり有り  
 2 暗褐色 ローム粒少量、粘まり有り

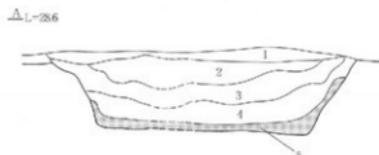
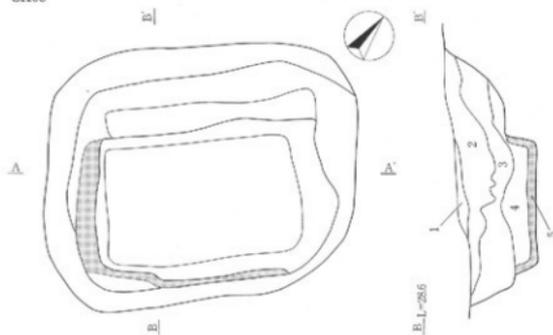
SK06



## 6号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、粘まり有り  
 2 暗褐色 ローム粒中量、ローム小・中ブロック多量、粘まり有り

SK05

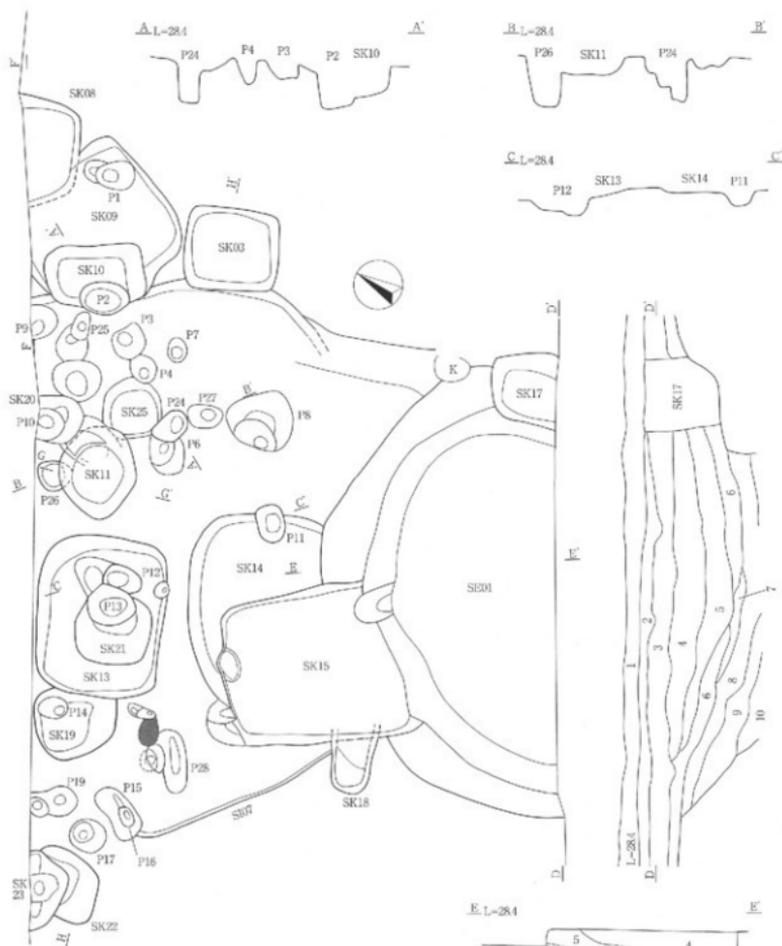


## 5号土坑

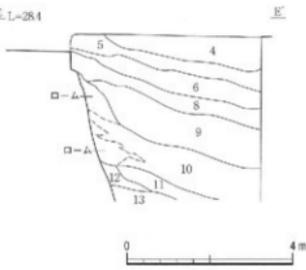
- 1 暗褐色 ローム粒多量、固く粘まり有り  
 2 暗褐色 ローム粒中量、ローム小・中ブロック少量、固く粘まり有り  
 3 暗褐色 粘土大ブロック少量、粘り粘まり有り  
 4 濃い褐色 粘土大ブロック主体、粘り粘まり有り  
 5 明褐色 目の詰まった純粋な白色粘土の取り付け層、固く粘まり有り



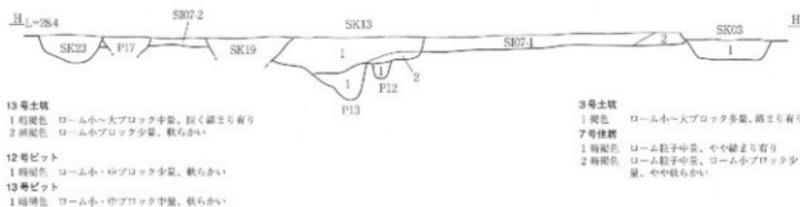
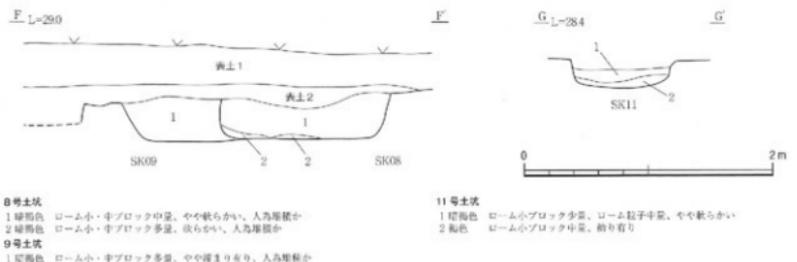
第39図 2・5・6号土坑



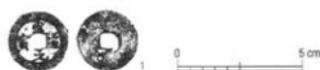
- 1号井戸
- 1 暗褐色 ローム粒中量、礫まじり有り
  - 2 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック、散らかい
  - 3 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、散らかい
  - 4 暗褐色 ローム粒中量、ローム小ブロック中量、散らかい
  - 5 暗褐色 ローム粒少量、ローム小・中ブロック少量、散らかい
  - 6 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、礫まじり有り
  - 7 暗褐色 ローム粒少量、散らかい
  - 8 暗褐色 ローム粒中量、ローム小・大ブロック多量、やや散らかい
  - 9 暗褐色 ローム粒少量、ローム小・中ブロック中量、やや礫まじり有り
  - 10 暗褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、やや礫まじり有り
  - 11 暗褐色 ローム中ブロック多量、やや散らかい
  - 12 褐色 ローム主体、やや粘りあり
  - 13 褐色 ローム主体、粘り土を含む、礫多量ありやや散らかい



第40図 土坑・ピット群、1号井戸、7号住居跡



第41図 3・8・9・11・13号土坑・7号住居跡土層



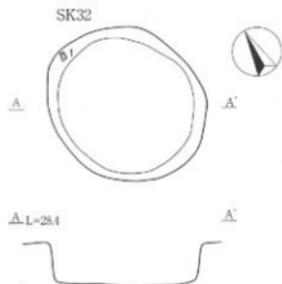
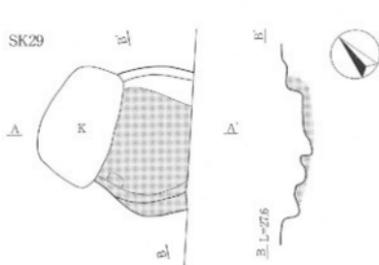
第42図 11号土坑出土銅銭

表18 11号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	鉄径	径	孔径	重量(g)	初鋳年	材質	特徴	備考
1	銅銭	至道元宝	2.45	0.61	1.91	995年(至道元年)	銅	背無紋	北宋銭

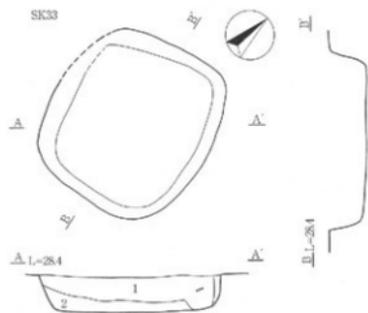
表19 32号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	長	幅	厚	重量		備考
1	鉄製品	穀具	5.4	4	0.7	26.36 g		



29号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、散らかり  
 2 暗褐色 ローム粒多量、ローム小ブロック中量、灰白色粘土小ブロック、やや凝まり有り  
 3 灰白色 白色粘土の層り付け物、凝まり有り

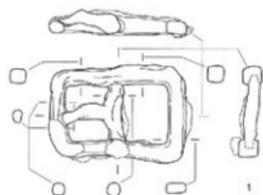


33号土坑

- 1 暗褐色 ローム粒多量、ローム小大ブロック中量、やや散らかり、人為堆積心  
 2 暗褐色 ローム粒多量、ローム小大ブロック中量、やや散らかり、人為堆積心



第43図 29・32・33号土坑



第44図 32号土坑出土遺物

表20 土坑一覧表

番 号	位 置	規 模 (長径×短径×深さ) m			平面形	備 考
1号土坑	P16	0.71	0.59	0.14	楕円形	SD3内
2号土坑	P15	1.01	0.96	0.57	円形	縄文時代前期
3号土坑	N17	1.16	1.01	0.24	長方形	
4号土坑	M18	-	0.67	0.43	長方形	
5号土坑	N17	2.48	2.03	0.64	長方形	
6号土坑	E26	-	0.96	0.43	円形	粘土盛り土坑
7号土坑	-	-	-	-	-	欠番。SE01に変更
8号土坑	N17	-	(L42)	0.36	方形	
9号土坑	N17	-	1.74	0.36	長方形	
10号土坑	N17	1.18	0.72	0.43	長方形	
11号土坑	N17	1.07	0.95	0.21	楕円形	渡草残出土
12号土坑	N17	-	0.54	0.10	不整形	歯骨出土
13号土坑	N17	1.96	1.53	0.71	長方形	
14号土坑	N17	2.18	-	0.07	長方形	
15号土坑	N17	-	1.83	0.51	長方形	
16号土坑	M19	1.51	0.62	0.57	長方形	
17号土坑	N17	-	0.73	0.44	長方形	
18号土坑	N17	-	0.88	0.51	長方形	
19号土坑	N17	1.01	0.88	0.15	長方形	樹木根穴か
20号土坑	N17	-	0.56	0.33	楕円形	樹木根穴か
21号土坑	N17	0.93	0.78	0.29	長方形	樹木根穴か
22号土坑	N17	0.79	0.76	0.34	方形	樹木根穴か
23号土坑	N17	-	-	0.21	方形	樹木根穴か
24号土坑	-	-	-	-	-	欠番
25号土坑	N17	0.63	0.61	0.11	円形	歯骨出土
26号土坑	-	-	-	-	-	欠番
27号土坑	-	-	-	-	-	欠番
28号土坑	-	-	-	-	-	欠番
29号土坑	J20	-	1.23	0.22	楕円形	粘土盛り土坑
30号土坑	G23	-	1.26	0.12	円形	
31号土坑	G23	-	1.32	0.34	楕円形	縄土出土
32号土坑	G23	1.38	1.19	0.38	楕円形	瓦片・瓦片出土
33号土坑	G23	1.44	1.36	0.39	方形	

表21 ビット一覧表

番 号	位 置	規 模 (長径×短径×深さ) m			平面形	備 考
1号ビット	N17	0.48	0.35	0.34	楕円形	柱穴か
2号ビット	N17	0.58	0.41	0.51	楕円形	柱穴か
3号ビット	N17	0.41	0.38	0.17	円形	
4号ビット	N17	0.35	0.32	0.29	円形	
5号ビット	-	-	-	-	-	欠番
6号ビット	N17	-	0.42	0.35	楕円形	樹木根穴か
7号ビット	N17	0.53	0.32	0.27	楕円形	樹木根穴か
8号ビット	N17	0.78	0.74	0.17	不整形	樹木根穴か
9号ビット	N17	-	0.39	0.28	楕円形	
10号ビット	N17	-	0.38	0.47	(円形)	樹木根穴か
11号ビット	N17	0.48	0.33	0.17	楕円形	
12号ビット	N17	0.43	-	0.14	楕円形	
13号ビット	N17	0.58	0.49	0.41	楕円形	
14号ビット	N17	0.35	0.28	0.10	楕円形	
15号ビット	N17	0.71	0.32	0.24	不整形楕円形	樹木根穴か
16号ビット	N17	0.26	0.17	0.26	楕円形	樹木根穴か
17号ビット	N17	0.42	0.38	0.27	円形	樹木根穴か
18号ビット	-	-	-	-	-	欠番
19号ビット	N17	-	0.28	0.20	不整形楕円形	
20号ビット	-	-	-	-	-	欠番
21号ビット	-	-	-	-	-	欠番
22号ビット	-	-	-	-	-	欠番
23号ビット	-	-	-	-	-	欠番
24号ビット	N17	0.46	0.29	0.54	不整形楕円形	柱穴か
25号ビット	N17	0.66	0.34	0.13	不整形	
26号ビット	N17	(0.40)	0.36	0.61	円形	柱穴か
27号ビット	N17	0.44	0.30	0.11	楕円形	樹木根穴か
28号ビット	N17	0.90	0.26	0.19	不整形	樹木根穴か

### 第3節 ビット

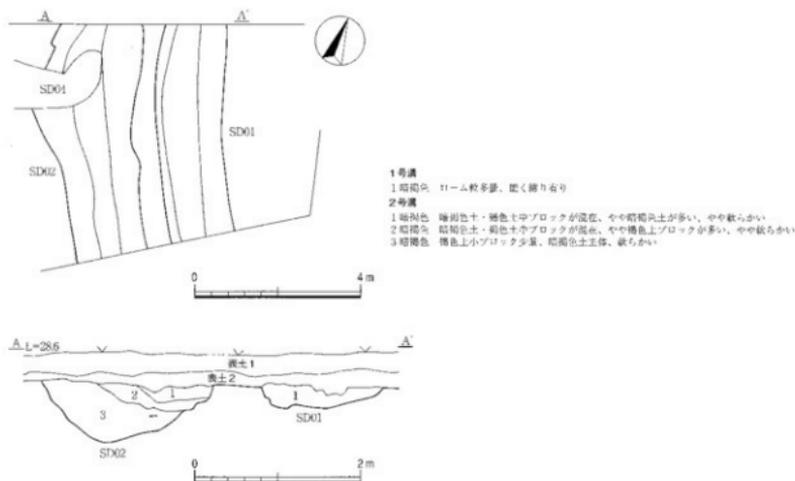
調査区内から22基のビットが確認されている。出土遺物がなく、配置関係が調査区内では捉える事ができなかった。中世の掘立柱列になる可能性のあるものもあると思われる。樹木の根穴や土坑と重なっており、時期・性格が不明なものがほとんどである。第40図にその配置を示し、表21に一覧表を示した。

### 第4節 溝

調査区内から6条の溝が確認されている。北東部で5条、南西部で1条確認されており、古代の時期まで遡るものはない。北東部の溝は、幅が広く直線的で、途中で調査区外に向かって90°に曲がっており、中世の屋敷地を囲むような堀跡の可能性が考えられる。南西部の7号溝は幅が比較的狭く、カーブを描いており、古代の住居跡を切り込んでいる。覆土の土質は近世以前の覆土のように思われ、中世の地割り溝等の可能性が考えられる。南西部の北寄り斜面にあった5号溝は近世後半代の地割り溝で調査対象から除外した。

#### 1号溝 (第45図)

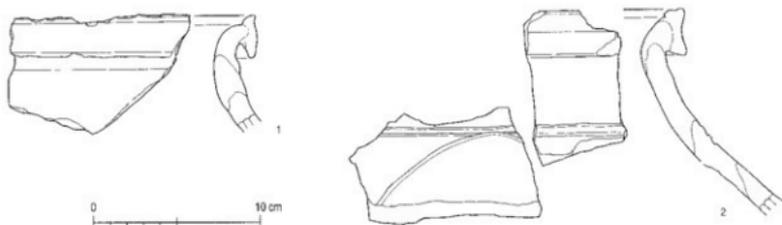
**位置** 調査区の北東部P14グリッドにある。**重複関係** — **規模と形状** 幅1.58m、長さ5m以上、断面形は浅い皿状。**覆土** 暗褐色の硬化した覆土。**遺物** — **所見** 走行方向が2号溝と並行しており関連が考えられ、覆土に硬化が見られ路面として使用している可能性がある。



第45図 1・2号溝

## 2号溝 (第45・46図)

**位置** 調査区の北東部 P14 グリッドにある。 **重複関係** 4号溝と接続するように、重複している。土層断面観察では、4号溝の新段階と思われる覆土が2号溝の上層を切り込んでいる。 **規模と形状** 幅2.92m、長さ5.8m以上、断面形は逆台形状。 **覆土** 3層。上層はロームブロックの含有が多い。 **遺物** 4号溝と接続する付近の覆土から常滑広口壺の口縁部片が出土している。 **所見** 走行方向が1号溝と並行しており関連が考えられる。2号溝の南部は北壁側の土層断面で見た底面の深さに比べて浅い。北壁の土層断面の覆土3層を4号溝の古段階の覆土と考え、1・2層を2号溝の覆土と考えると2号溝が4号溝の古段階よりも新しい遺構となる。4号溝古段階は2号溝と重なる個所で深くなり北に折れている。



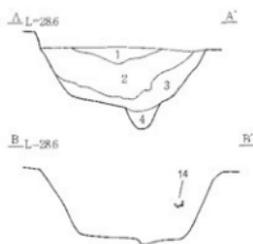
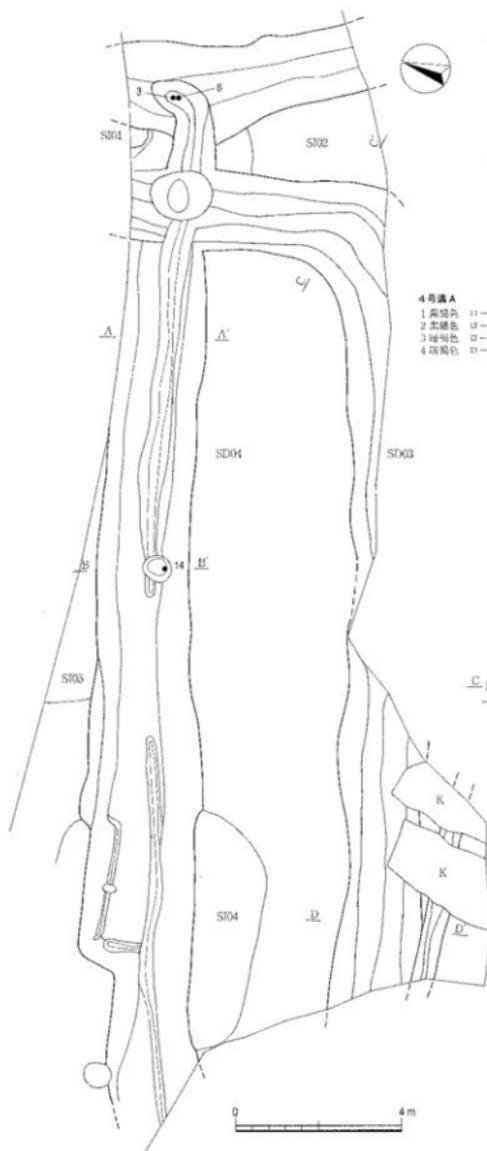
第46図 2号溝出土遺物

表22 2号溝出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	常滑	広口壺	-	-	-	白色粒多量、黒色粒少量	灰色	良好		
2	常滑	広口壺	-	-	-	白色粒、石炭粒	灰オリーブ色	良好		

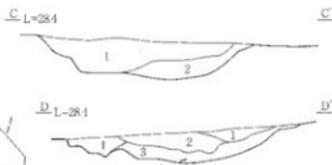
## 3号溝 (第47・48図)

**位置** 調査区の北東部 O15・P15・P16 グリッドにある。 **重複関係** 4号溝と交差し、切り込んでいる。 **規模と形状** 幅2.15m、長さ24m以上、断面形は浅いU字状。 **覆土** 暗褐色の自然堆積。 **遺物** かわけ、常滑片が覆土から出土している。 **所見** 位置と切り合い関係から4号溝のあとに、やや南にずらして、拡張掘削した溝跡と見られる。断面形状は4号溝ほど整わず新しい溝と考えられ、覆土も近世遺構の覆土に似ている。



4号溝 A

- 1 黒褐色 ローム粒少量、やや軟らかい
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量、炭化物粒極少量、ローム粒中量、やや締まり有り
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化物粒極少量、ローム粒中量、やや軟らかい
- 4 暗褐色 ローム小ブロック極少量、炭化物粒極少量、ローム粒少量、やや軟らかい



3号溝

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、軟らかい
- 2 暗褐色 暗褐色土中ブロック主体の隙し隙僅少、やや軟らかい
- 3 暗褐色 暗褐色土中ブロック主体、やや軟らかい

第47図 3・4号溝



第48図 3号溝出土遺物

表23 3号溝出土遺物観察表

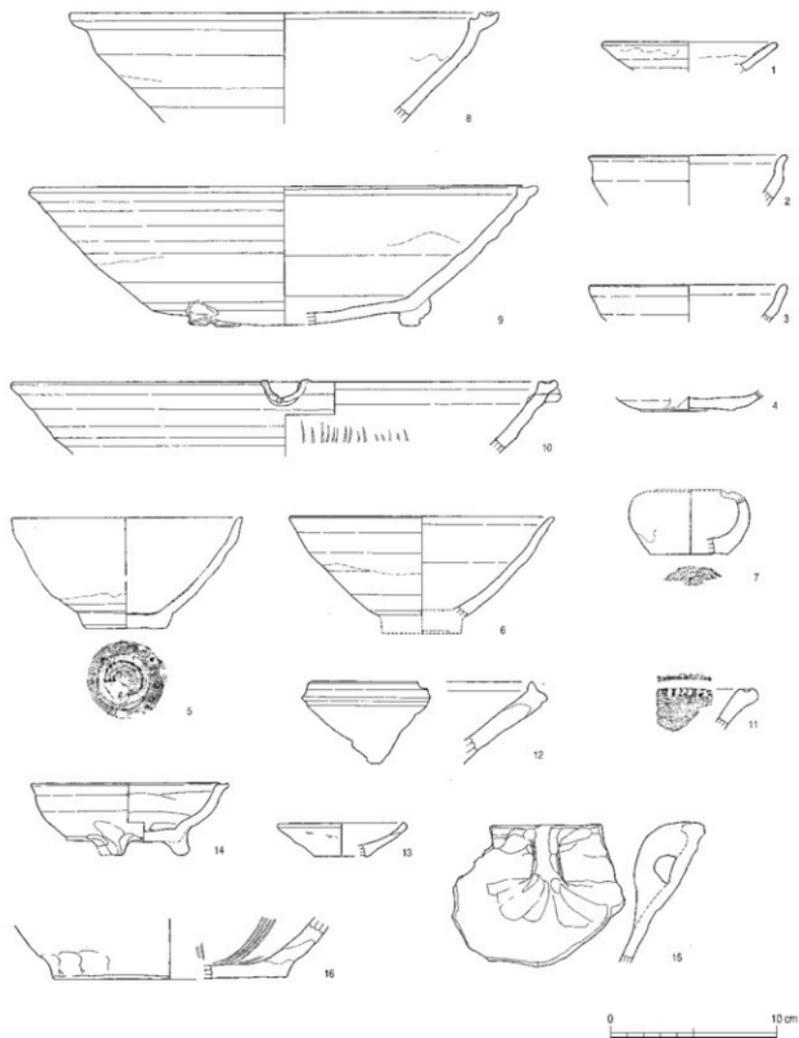
図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	土師質土器	小皿	5.6	1.0	3.8	雲母、褐色粒多量	棕色	良好		
2	土師質土器	小皿	6.0	1.8	(3.4)	雲母、白色粒多量	褐色	良好		
3	常滑	広口壺	-	-	-	白色粒多量、黒色粒少量		良好		

#### 4号溝 (第47・49図)

**位置** 調査区の北東部 O15・O16 グリッドにある。 **重複関係** 3号溝と交差し、切り込まれている。最終段階の平坦な底面の下に、幅の狭い薬研状の古い掘り込みがあり、4号溝には古い段階がある。 **規模と形状** 幅 2.30m、長さ 25m 以上、断面形は逆台形状。平面形から見て、南西の端は浅くなりながら調査区外に伸びている。4号住居跡付近の底面に屈折痕と小溝が見られる。 **覆土** 4層は古い段階の堆積である。4層は南西端から北東屈曲部まで全体を通して。 **遺物** 土師質土器の香炉、古瀬戸折縁深皿、常滑壺片が覆土から出土している。 **所見** 溝の底面に見られる拡張掘削痕と小溝の痕跡から、当初は薬研状に幅

表24 4号溝出土遺物観察表

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	備考
1	古瀬戸	縁輪小皿	(10.5)	-	-	精良	にぶい棕色	良好	灰輪縁掛け。	
2	古瀬戸	天目茶碗	(12.0)	-	-	精良	にぶい棕色	良好	黒褐色の鉄軸掛け。	
3	古瀬戸	小火鉢	(12.0)	-	-	精良	灰黄色	良好	灰白色灰輪掛け。	
4	古瀬戸	茶入か	-	-	(5.8)	精良	灰色	変元短	底部回転糸切り、淡い灰色地に褐色鉄軸掛け	
5	古瀬戸	平碗	-	-	-	精良	にぶい棕色	良好	高台臺付け部に糸切り痕。	
6	古瀬戸	平碗	-	-	-	白色粒	浅黄色	良好	オリーブ灰色灰輪掛け	
7	古瀬戸	合子	-	-	-	精良	灰褐色	良好	底部回転糸切り。灰輪掛け	
8	古瀬戸	折縁深皿	-	-	-	白色粒、石英粒	にぶい黄棕色	良好	灰輪掛け	
9	古瀬戸	折縁深皿	-	-	-	白色粒	にぶい黄棕色	良好	灰輪掛け	
10	古瀬戸	折縁深皿	-	-	-		灰色	良好	片門。卸し日あり。	
11	常滑	楕鉢	-	-	-	長石、石英	オリーブ褐色	良好	口縁端部に沈線、底部内側にキザミ。	
12	常滑	楕鉢	-	-	-	灰白色粒多量	褐色	良好		
13	土師質土器	小皿	(7.8)	2.0	(3.0)	炭粉粒	にぶい棕色	良好	底部回転糸切り。	
14	土師質土器	三足香炉	12.0	4.5	6.8	石英、雲母細粒、薄緑舎針	にぶい棕色	良好	底部回転糸切り。三足貼り付け。	
15	土師質土器	内耳鍋	-	-	-	石英、雲母細粒、薄緑舎針	褐色	良好		
16	土師質土器	楕鉢	-	-	(14.0)	石英、長石、褐色粒	にぶい黄棕色	良好	4本単位の卸し目。	

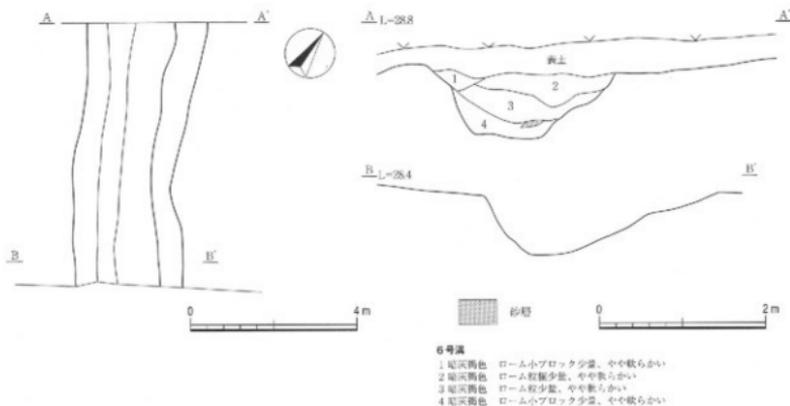


第49図 4号溝出土遺物

の狭く長かった溝の南西端部を一部埋め戻し、逆に幅を拡張し、溝の南西端部を北東方向へ後退させながら、拡張再掘削を2回程度行っているものと見られる。

### 6号溝 (第50図)

**位置** 調査区の北東部 L18 グリッドにある。**重複関係** 9号住居跡を切り込んでいる。**規模と形状** 幅2.66m、長さ6m以上、断面形はU字状。**覆土** 表土に近い土質で、暗灰褐色土主体の覆土。**遺物** 一 所見 出土遺物は見られないが、形状と覆土は3号溝に近いと思われ、近世段階で埋没していると見られる。



第50図 第6号溝

### 7号溝 (第51・52図)

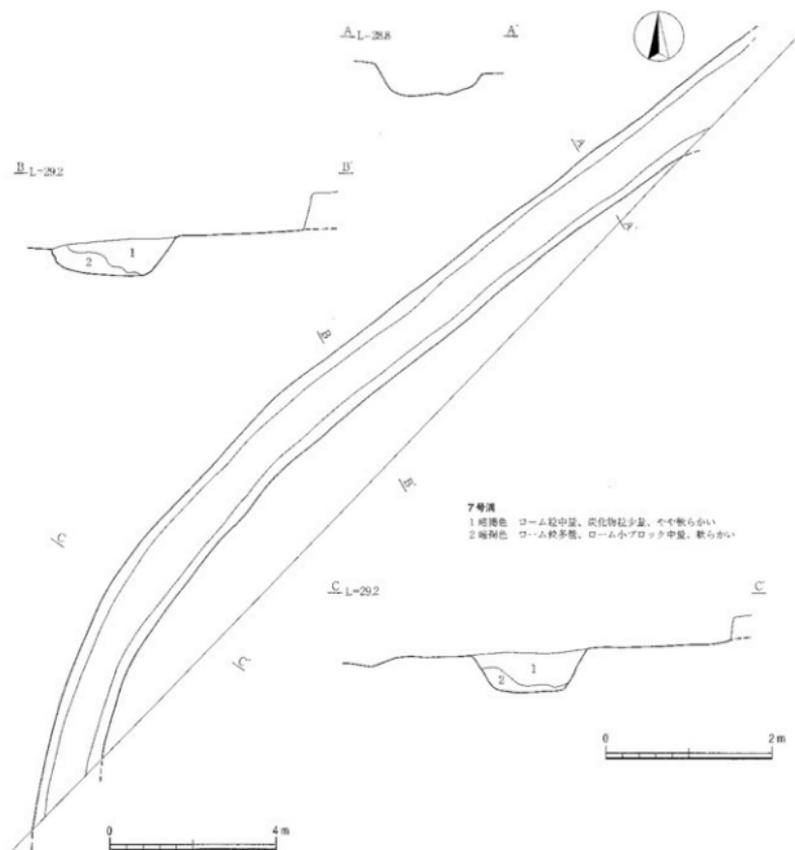
**位置** 調査区の南西部 F24・G24 グリッドにある。**重複関係** 13号住居跡を切り込んでいる。**規模と形状** 幅1.44m、長さ26m以上、断面形は逆台形状。**覆土** 暗褐色土主体の覆土。**遺物** 波来銭が覆土から出土している。**所見** 中世の時期の区画溝の可能性が考えられる。



第51図 7号溝出土銅銭

表25 7号溝出土遺物観察表

図版番号	種別	銭種	径	孔隔	重量(g)	初鋳迄年	材質	特徴	備考
1	銅銭	天聖元宝	243	0.68	2.46	1023年(天聖元年)	銅	背無紋	北宋銭
2	銅銭	開元通宝	242	0.64	2.83	621年(武徳4年)	銅	背無紋	唐銭
3	銅銭	祥符通宝	235	0.61	2.28	1008年(大中祥符元年)	銅	背無紋	北宋銭



第52図 第7号溝

## 第5節 遺構外遺物

### 縄文土器

調査地区内の東部において縄文時代前期の土坑が1基確認されている。土坑からは、縄文時代前期の浮島式土器片が出土している。その他特に調査区の北東部と南西部を中心に、古墳時代から、中世にかけての遺構の覆土中に混入した状態で縄文土器が、全体で7730g、破片点数で350点余り出土している。時期別には、早期の三戸式（第53図1～5）から、茅山式土器（第53図6・7）、前期の黒浜式土器（第53図8～17）、浮島式土器（第53図18～第54図40）、興津式土器（第54図41～45）、粟島台式土器（第54図46～48）、後期の壺之内式土器（第54図49～54）、加曾利B式土器（第54図55～65）と多種類が確認されている。量的に多いのは、前期浮島式と後期壺之内式土器である。周辺にはこれらの土器を使用した縄文時代の生活痕跡が埋もれているものと思われる。

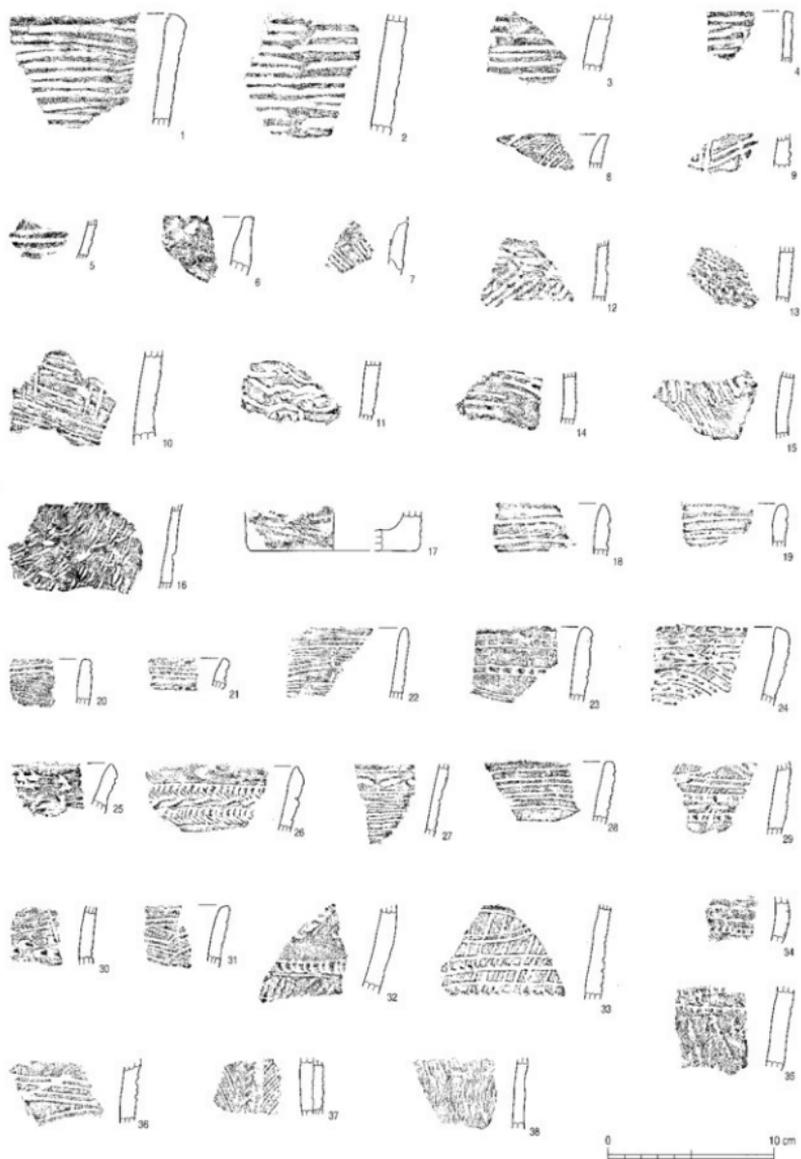
### 弥生土器

弥生時代後期の竪穴住居がある北東部域ばかりでなく、南西部でも縄文土器と同様に古墳時代から中世の時期の遺構の覆土中から、弥生時代後期の土器片が、全体で約200点余り出土している。その中で口縁部片や特徴を持った胴部破片を第55図に示す。第55図の1・2は5本1単位の櫛歯状工具による区画と区画内に波状文を施している。3・4は付加条1種縄文の施された胴部片で、他の土器に比べ付加した縄が緩やかで幅がある。5～18は口縁部片で、口唇部にはキザミや縄文を施し、複合口縁下端にはキザミや刺突が施されている。12・13は口縁部外面に縦長の薄い突起の貼りつけがある。19は内湾した器形の口縁部片で付加条1種縄文が施されている。20～26は頸部が無文、27～29は波状文が、30～33は横定文が、36～37は格子状沈線文が施されている。38～42は胴部片で、羽状構成のものもある。43～48の底部は木葉痕が主体である。

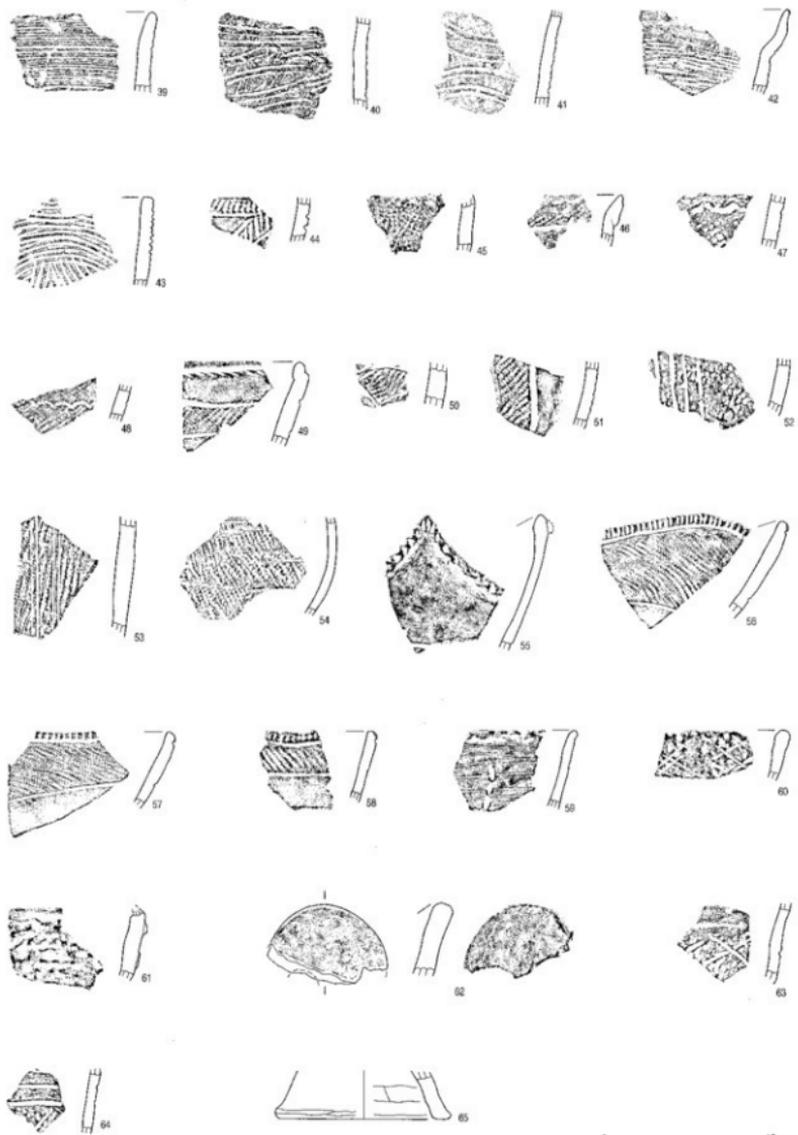
48は羽状構成の撚り糸文を施している。南関東系の裝飾壺片と思われる。49は付加条1種縄文を施した台付壺器形の土器であり、たいへん珍しい。

### 滑石製品その他について

中・近世の溝や土坑・ピット等から古墳時代の土器（第56図）と滑石製品の制作に関わる、滑石の原石、剥片やチップ、加工途中の破損・廃棄品が出土している（第57図）。



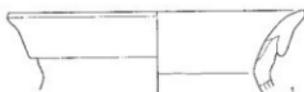
第 53 图 遺構外出土縄文土器 1



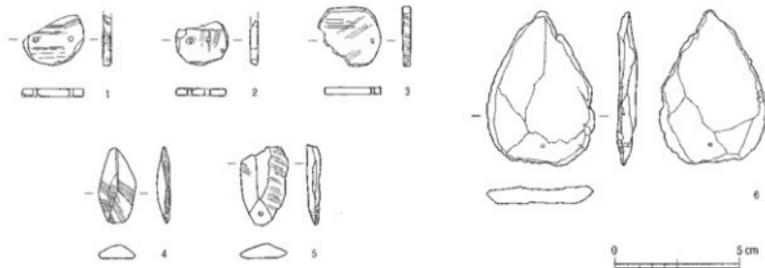
第54圖 遼構外出土雜文土器2



第55图 遺構外出土弥生土器



第56圖 遺構外出土土師器



第57圖 遺構外出土滑石製品

## 第V章 総括

宮平遺跡から出土した遺構は、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期の住居跡3軒、古墳時代後期の住居跡12軒、平安時代の住居跡3軒、中世の溝跡が6条と溝跡と関係すると思われる土坑・ピット群と井戸1基、近世の粘土貼り土坑2基、その他時期不明住居跡1軒である。出土遺物は、縄文時代早期の三戸式土器～後期の加曾利B式まで、弥生時代後期の土器、古墳時代後期の土師器と土製品、石製模造品とその製作に関わる滑石、平安時代の土器と鉄製品、中世の常滑・古瀬戸の陶器類である。特に古墳時代後期の石製模造品の製作に関わる滑石の原石、製品素材・未製品・破損品・剥片・チップや砥石が多く出土している。

遺跡内の古代の集落の分布は、中央部の浅い谷を挟んで北東部と南西部に大きく分かれ、北東部で弥生時代後期の集落と古墳時代の集落が見られる。南西部では、弥生土器片は見られるが、遺構は調査区内で確認されず、古墳時代後期と平安時代の集落が展開している。縄文時代については、住居跡が確認されていないが、遺物の存在から周辺に存在するものと見られる。

南西部では、炉を持った古墳時代後期の5世紀末頃の住居からはじまって、6世紀前半～中頃、後半にかけての竪穴集落が繰り返し営まれ、密集・重複して確認されている。特に、滑石製模造品が多く、工房としては見つからなかったが、滑石の原石、剥片やチップ、未製品も少なからず出土し、剣型、双孔円盤、有孔円盤、白玉等の製作工房としての利用の時期があったものと思われる。剣型に鑊を持つやや立体的なものもあるが、大多数は平たく薄い製品を製作しているようである。それらの製作痕跡は12・16・17号住居跡で目立ち、調査範囲内においては6世紀中頃～後半代が最も盛んであったと推測される。

北東部では、中世の遺構が多く、同じ場所に幅広の断面箱葺形状の堀跡と見られる溝を繰り返し掘削しているようすが窺われた。最も古いと思われる4号溝は古段階において、底面幅の極端に狭い葺堀の形状だったようで、南西端で深度が浅くなり、調査区外では南側へ渡る土橋になっているのではないかとと思われる。溝で囲まれた空間は、4号溝の北東端が90°北西へ曲がっていることから調査地区の西側に広がるものと想像される。4号溝の南西部域は方形の粘土貼り土坑、井戸と思われる大型土坑、その他ピットと土坑群、自然樹林を伐間をしたような、大小さまざまな大きさの樹木の抜き取り穴等が密集している。建物の柱穴になりそうなピットもあり、小型で円形の墓坑らしきものもわずかにある。中世の後半代に溝を掘り内部を利用するために造成したような様子である。出土遺物は、日常生活に使用したであろう、内耳鍋、古瀬戸の平碗、折縁深皿や常滑の広口壺、また土師質土器の香炉等が出土し、15世紀頃から始まる城館跡を想像させる。溝の完全な埋没は、近世の前半頃であろうか、その頃遺跡の中央部の谷には、小型の粘土貼り土坑がつくられている。谷に下る斜面部では近世陶器片や寛永通宝が表採され、遺構にはならないが斜面を削り、区画溝や段差状の地形改変を行うなど近世段階の新たな開墾の痕跡が窺われる。

(註・参考文献)

- 註1 1991年 渡辺 誠【福田(神明前)貝塚】古代学研究所研究報告第2輯  
註23 2006年 内山俊身「応永期における常陸東條氏の動向」『茨城県立歴史館報』33による  
2009年『土上遺跡』茨城県教育財団調査報告第309集  
2009年『遺跡後遺跡』茨城県教育財団調査報告第308集



遺跡全景（北東から）



遺跡西部全景



調査前風景



北東部全景



南西部全景



SI2 遺物出土状況



SI3 完掘状況



SI4 完掘状況



SI4 遺物出土状況



SI5 完掘状況



SI7 遺物出土状況



SI8 完掘状況



SI9 完掘状況



SI10 完掘状況



SI10 カマド完掘状況



SI10 貯蔵穴遺物出土状況



SI11 遺物出土状況



SI12 完掘状況



SI14 完掘状況



SI14 遺物出土状況



SI14 遺物出土状況



SI15 完掘状況



SI15 カマド完掘状況



SI16 完掘状況



SI16 遺物出土状況



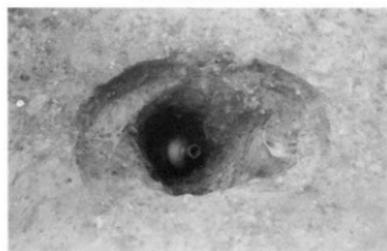
SI16 カマド



SI16 床下掘り方



SI17 完掘状況



SI17 P2 遺物



SI17 遺物出土状況



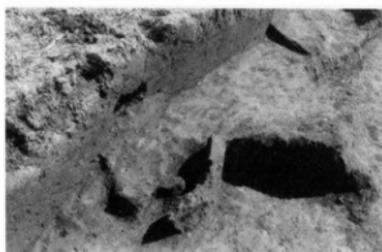
SI17 カマド遺物出土状況



SI17 床下掘り方



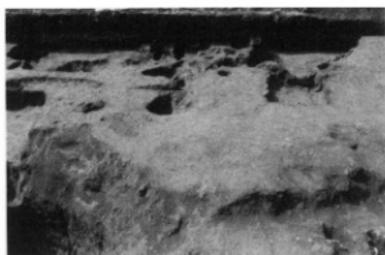
SI18 カマド完掘状況



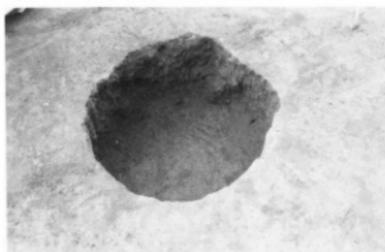
SI19 完掘状況



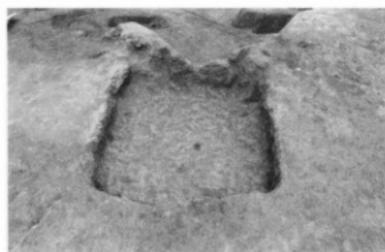
中世土坑・ピット群（西から）



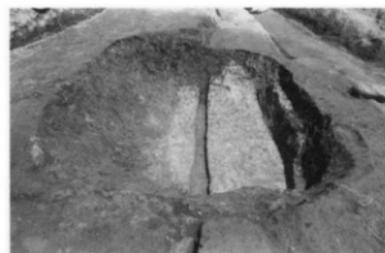
中世土坑・ピット群（南から）



SK2



SK3



SK5



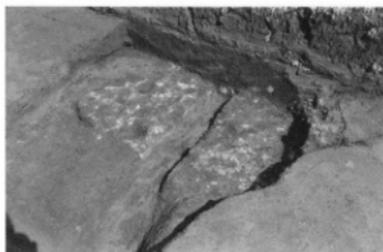
SK6



SK7



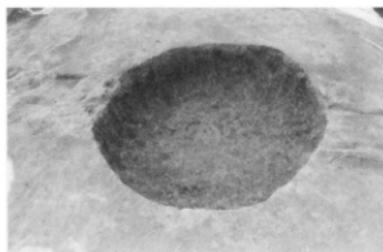
SK16



SK29



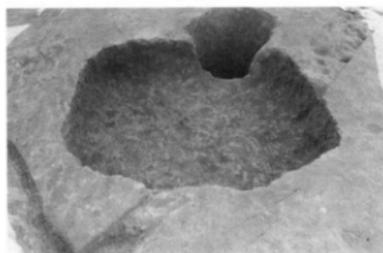
SK30



SK32



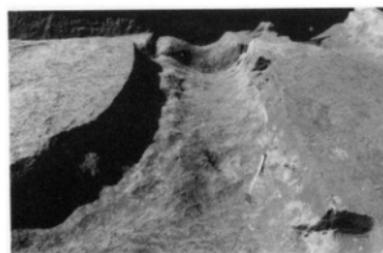
SK32 遺物出土状況



SK33



SD1



SD3



SD4



SD4 (西から)



SD4 (東から)



SD4 遺物出土状況



SD4 古瀬戸深皿出土状況



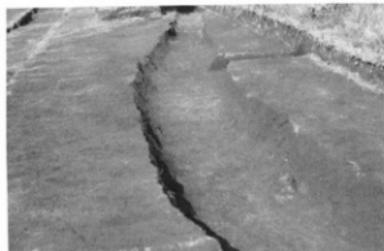
SD5



SD6



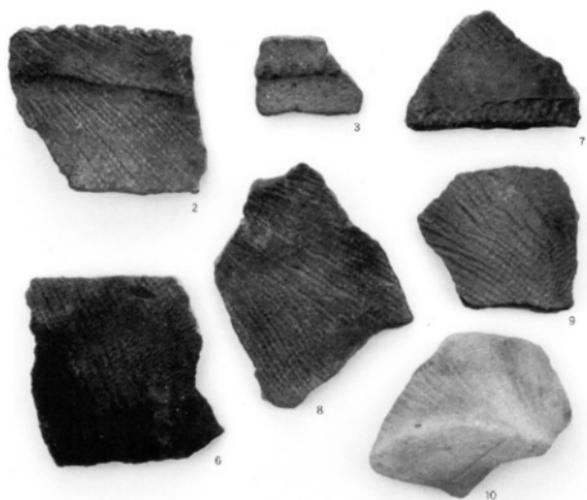
SD7



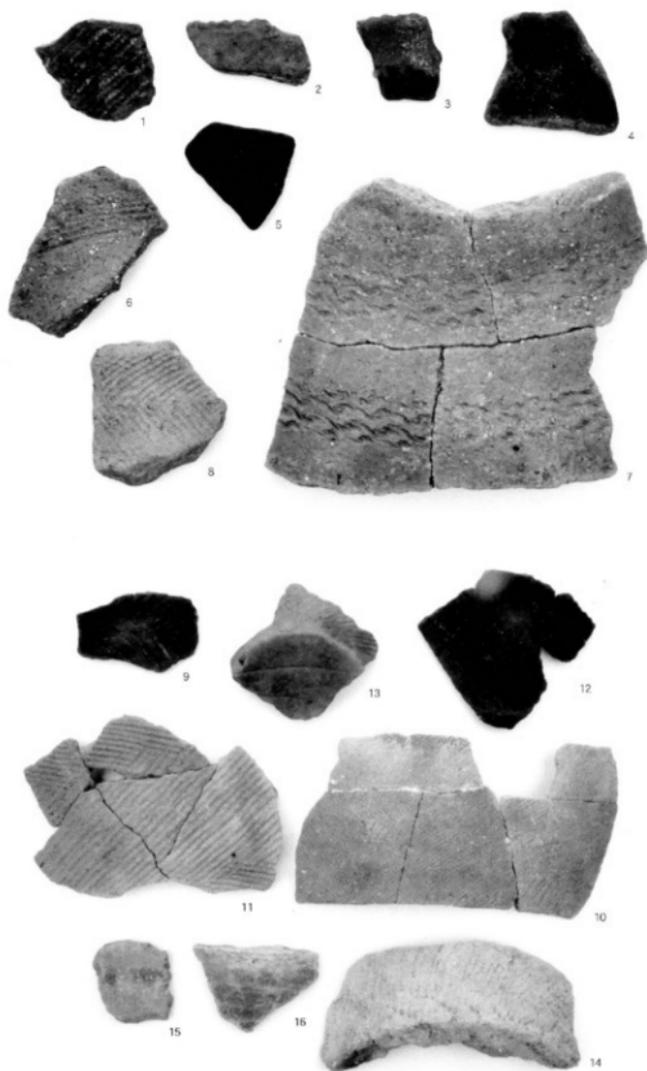
SD7 東部 (西から)



SI3



SI4



SI7 (1 ~ 16)



SI10-1



SI11-1



SI13-1



SI14-5



SI14-1



SI15-4



SI16-1



SI16-2



SI16-3



SI17-1



SI17-12



SI17-7



SI17-8



SD4-14



SI19-1





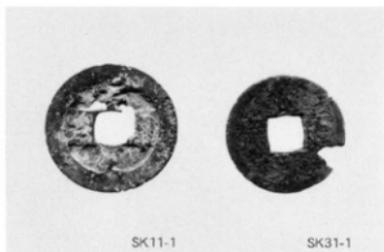
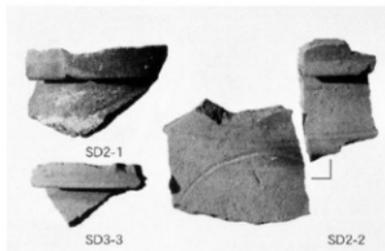
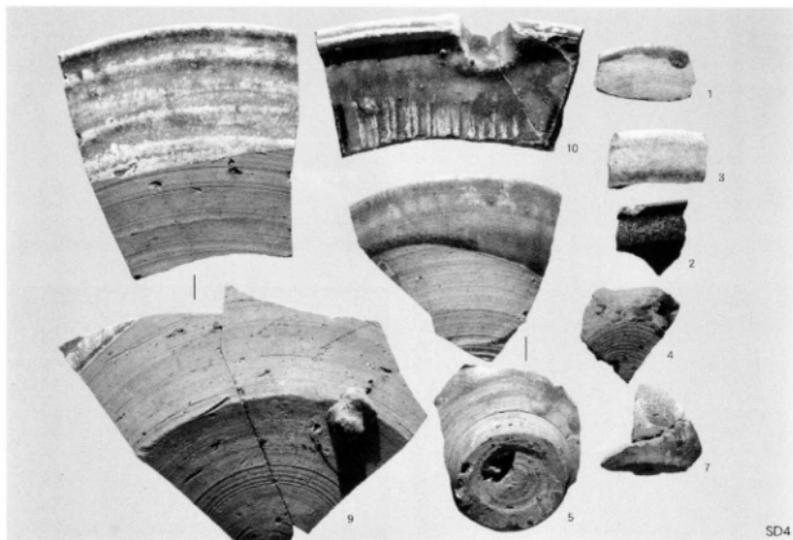
SI18-1



SI18-2

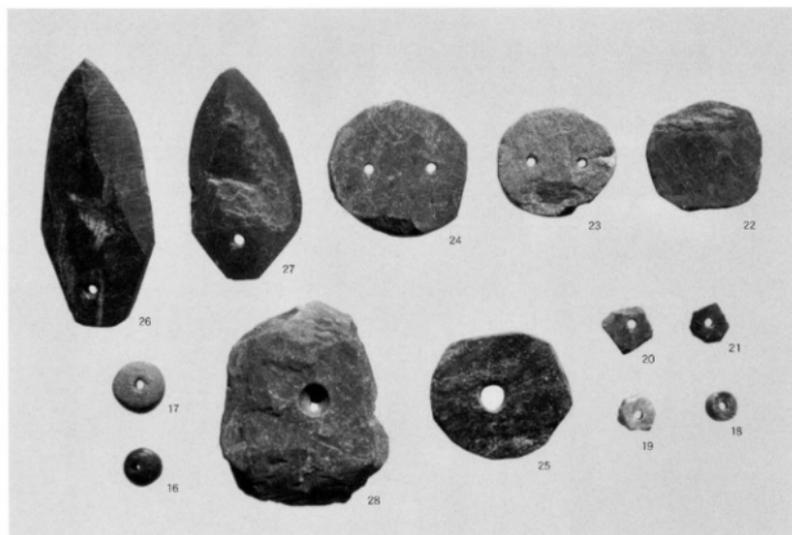


※墨書土器の赤外線写真撮影は三井考測の協力による。

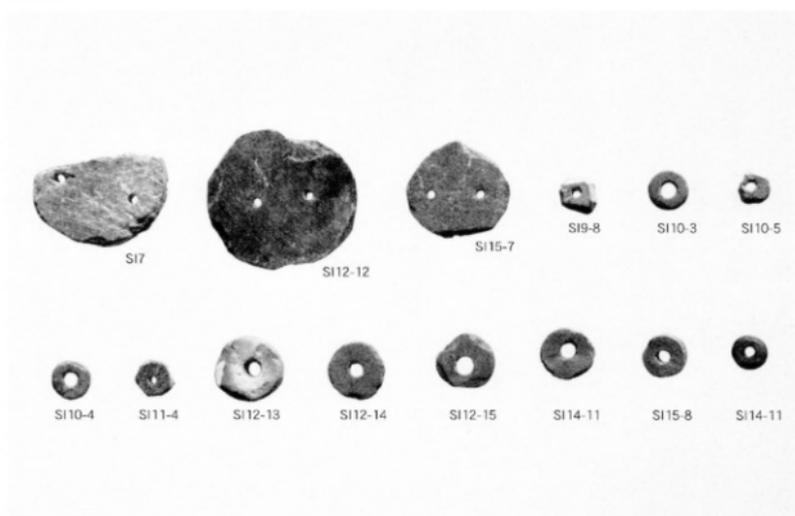




SI16 出土滑石製品



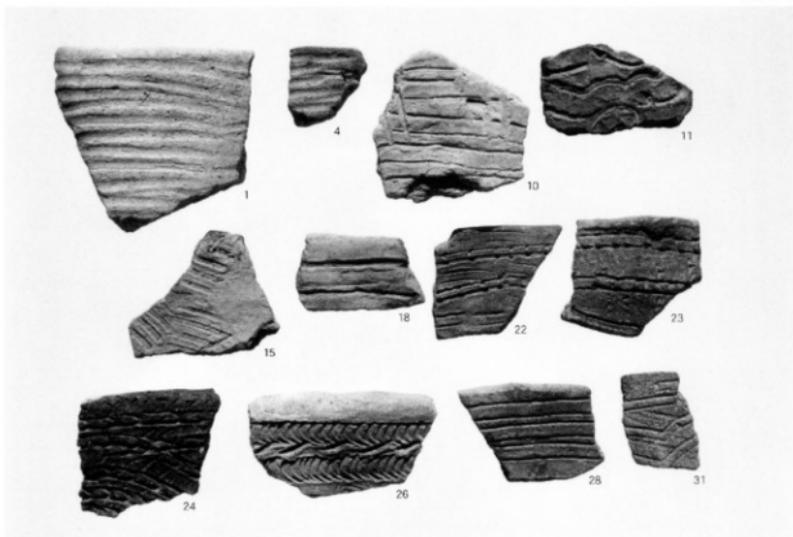
SI17 出土石製模造品及び土製小玉



SI7 ~ SI15 出土双孔円盤・白玉



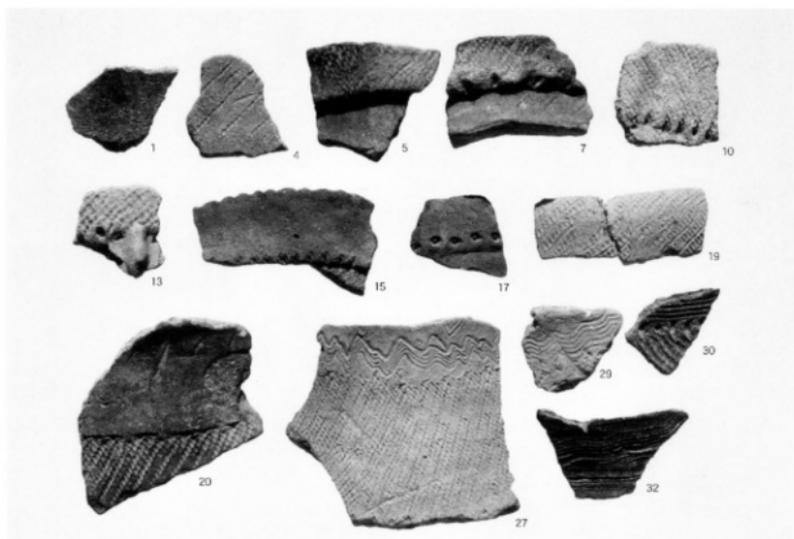
遺構外出土石製模造品



遺構外出土縄文土器 1



遺構外出土縄文土器 2



遺構外出土弥生土器 1



遺構外出土弥生土器 2

## 報告書抄録

ふりがな	みやだいらいせき
書名	宮平遺跡
副書名	市崎神宮寺地区集落道路整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	福敷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
著者名	土生朗治
編集機関	(有)毛野考古学研究所
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1
発行機関	福敷市教育委員会
所在地	〒300-0736 茨城県福敷市八千石18-1
発行年月日	2010(平成22)年3月25日

採取遺跡	所在地	コード 市町村道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宮平遺跡	福敷市市崎町宮平 1210番地2外	08449026	35°56'35"	140°21'51"	20090211 ～ 20090330	1,493㎡	市崎神宮寺地区集落道路 整備事業

採取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮平遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世  時期不明	土坑1基 竪穴住居跡3軒 竪穴住居跡12軒 竪穴住居跡3軒 溝6条 井戸1基 土坑28基 ピット22基	縄文土器(浮筒式、他) 弥生土器(甕) 土師器(坏、甕、甕、高坏) 石製模造品 陶器(古瀬戸、常滑) 土師質土器(内耳瓶、香炉、小皿) 金属製品(鉄具、鐵)	6世紀代を主体とした古墳時代の竪穴住居跡の層土中からは、石製模造品やその製作工程上の廃棄品が多く出土している。

要 約	<p>宮平遺跡は、主に弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の集落跡と溝によって区画された中世の遺構群からなる遺跡である。古墳時代後期の住居跡からは、石製模造品の出土が多く、平安時代の住居跡からは黒書土器が、土坑からは鉄製の器具が出土している。中世の溝は屋敷を区画する堀跡と思われ、井戸や粘土張り土坑、ピット群が見られ、古瀬戸や常滑、土師質土器の香炉が出土している。</p>
-----	--

茨城県稲敷市  
宮平遺跡

印刷 平成 22 年 3 月 15 日

発行 平成 22 年 3 月 25 日

編集 有限会社 毛野考古学研究所  
〒 379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1  
電話 027-265-1804 FAX 027-265-5352

発行 稲敷市教育委員会  
〒 300-0736 茨城県稲敷市八千石 18-1  
電話 0299-79-3211

印刷 株式会社 ライフ  
〒 286-0134 千葉県成田市東和川 595  
電話 0476-24-1564 FAX 0476-24-2226